587-286
1200501524715
286

366

頭山滿翁
の書画

七和昭・交内・大・二八

最近の頭山翁

最近の頭山翁

四十歳頃の頭山翁

587-286

頭山滿翁の眞面目

頭山滿翁の眞面目　目次

はしがき……三
是が自分の身上話の初めてぢや……四
私の兩親……五
十四歳志を立つ……六
本を讀む事は好きであつた……七
獨りで淋しくない……八
第一回の死損ひ十一歳の時……八
少時私の讀書法……一〇
己れは泣かぬ兒であつた……一一
二度目の死損ひ……一一

目次

目　次

俺れの等賣り……一三
俺れの碁將棋は眞劍だと强くなる……一三
生れながらのだゞくさ者……一五
仙人修業の三年……一六
平野國臣と近藤勇……一七
平岡は行儀がよかつた……一九
洋服着て平岡と寫眞をとる……二〇
江藤新平の擧兵……二〇
正直者前原一誠……二一
私の獄中生活……二三
入獄中母の訃音……二四
南洲の師友川口雪蓬……二五
二度目の鹿兒島入り……二八
河野主一郎は起たなかつた……三〇
大珍物の洋傘……三一
氣位ひは何時も大名ぢや……三一
大久保暗殺の報……三三
土佐の民權婆さん……三三
東北無錢漫遊……三四
仙臺に三日……三五
弘前で木戸御免……三五
黒石町で演說で飯が食へた……三六
端坐漢學先生を凹ます……三七
腹と脚は誰にも劣けんぢやつた……三八
越前へ無錢旅行……三九
土佐で政談演說……四〇
福岡でも演說が流行……四一
板垣は純忠の士……四一
福陵新聞時代……四二
玄洋社の青年訓練……四五

目次

河豚は食はさぬ……四六
薪買はんか……四六
來島が大野仁平を撲る……四七
素裸で押入住ひ……四七
會心の友荒尾精……四八
聞多でも〇多でも……四九
荒尾内閣を見たかつた……五〇
偉人は五百年に一度降る……五一
中江兆民は不愛想者……五二
伊藤山縣駄目……五三
後藤象二郎の太肚……五四
條件付きの金は借りぬ……五五
天下人無きを歎ずる勿れ……五六
條約改正騷ぎ前後……五八
小身の豪傑小村壽太郎……五九
小村の六升酒……六〇
小男の小村・暴魯を挫く……六〇
傑僧南天棒……六一
鹿鳴館の馬鹿踊り連を糞溜へ……六二
伊藤の智は横へ廻つた……六二
何んでもやるぞ……六三
陸實は硬直……六四
三浦の碁は腕力で行く……六四
風鈴均一碁で三浦の大敗……六五
鳥尾訪問の失敗……六六
鳥尾、井上を罵る……六七
「お前は許さん」と井上へ……六九
大晦日に廻る金……七一
濱の家無錢寄留……七二
副島の色男氣取り……七三

佐々の「禿げ」……七四
之が誠の道ぢやらう……七六
安場の三ば……七七
今日天下の急務は頭山が金を作る事です……八〇
私を漢の高祖に見立てた……八一
副島の膽伸ばし……八二
岡田の女將を驚かす……八三
年中正月常二十才……八五
頭山とは如何なる仁か？……八五
お妻の髪を切つた話か？……八六
政府の腰抜けを追分で諷ずる……八七
鼻かけの英雄……八八
從道大西郷に叱らる……八九
大西郷橋本左内に叱らる……九一
大西郷の師友伊地知正治……九二
大西郷の敬服した久坂玄瑞……九三
木戸、大久保を罵る……九四
木戸、黒田を投げ倒す……九七
南洲の無頓着……九九
高田が斬られた時の事か？……一〇〇
番町屋敷の化物……一〇一
頭山が吏黨になつた……一〇一
頭山を斬ると云ふ……一〇二
小身非力の豪傑大井憲太郎……一〇三
大井の臍……一〇四
星も大井には閉口……一〇五
星が私を議員に擔がうとした……一〇五
星を助けた……一〇六
劍難もぐり……一〇六
地稅輕減問題……一〇七

目　次

松方總理を叱る……一〇八
伊藤は能く人才を用ひた……一〇九
品川へ借金の相談……一一〇
品川は善人ぢやつた……一一三
丸裸で高利貸撃退……一一三
國民協會入黨拒絶……一一四
大津事件の時……一一五
硬骨漢兒島惟謙……一一六
日露戰爭、桂太郎……一一七
シルクハツト問題……一一八
聽かなければ伊藤を斬る……一一九
南洋視察費を飲む……一一九
金の貸しつぷり金子元二郎……一二〇
炭坑を賣つた七十萬圓の行衞か？……一二三
借金證書は正氣歌の文句……一二三

支那へ入院したやうぢや……一二四
美和も氣の強い奴ぢや……一二五
佛人リシヤール來訪……一二六
大隈との會見……一二六
室蘭埋立願ひ……一二八
頭山の嘘は公然……一二九
青木周藏は變り者……一三一
權兵衞大臣……一三二
孫文をどうする……一三三
賴つて出る化物……一三四
印度亡命客ボース……一三五

內田良平氏談

深夜の電話……印度人の神隱し……明けつ放しの答辯……私の顏は潰れても……首に
して渡そうか！

目　次

ボース氏の談を綜合して……一五一
頭山翁を訪問す……日本退去の命令……印度人消えて無くなる……新宿の中村屋へ……病氣が取持つた奇緣……日本政府の保護下に置かる……上總一の宮の一ト夏……日印結婚……忠實なりし妻よ！……日本へ渡る迄……虎口を脫れる……香港の災厄……歸化日本人として
三浦と大隈……一八一
天下の山縣になり切れんのが惜しい……一八二
山縣は首でも取られると思ふたのぢやらう……一八三
安達謙藏、白で碁を打て……一八四
清浦はおとなしい……一八四
總理級の人々……一八四
護憲三派運動と純正普選の時……一八五
私の握手の始め、熱海に三浦を見舞ふ……一八五
立雲號の由來……一八六
宗演と禪問答……一八九
東宮御外遊時、二荒伯の誓文……一九〇
杉浦は五重の塔……一九〇
杉浦は眞君子……一九一
俺れは田中と同じ年に死ぬと言はれた……一九一
一遍で小便が出切るか？……一九一
遷宮式に二日斷食……一九二
何よりも放蕩を愼む事ぢや……一九二
御慶事式場でネクタイの借物……一九三
震災の時……一九四
靈南坂の家が燒けた……一九四
議員立候補の推薦狀……一九五
誕辰祝ひが大袈裟で聊か迷惑……一九六
水戸家の昇爵時宮相と會見……一九七
出雲大社へお詣り……一九八
……二〇〇

目　次

大本教と立雲翁……一〇〇
板垣伯の銅像……一〇一
喜樂の女將井上を叱ます……一〇三
女は面倒を見てやる事ぢや……一〇四
犬養總理は貰錄たつぷり……一〇五
議會のだらしなさ……一〇五
神に仕へる者の仕合せ……一〇六
米國新聞記者の來訪記……一〇七
早朝の明治神宮參拜……一〇九
雲右衞門に素語り三席……一一一
宮崎滔天の浪花節……一一三
翁と遠山滿との寫眞……一一四
木戸が差した兼定……一一五
私はあまり執着しない……一一五
相撲取りは常陸と太刀……一一六

死んで生れ變れ……一一六
革丙將軍の遺物……一一七
飛行機は愉快々々……一一七
美人天上より落つ……一一八
これは役に立たん方ぢや……一一八
七日の斷食——一食二十杯……一一〇
胃潰瘍を三度やつた……一一一
顏が賣れると世間へ通る……一一一
親に似ぬ子、似た子……一一二
俺は欺かれん……一一三
紙幣は袂へ無造作に……一一三
石塔の頰かぶり……一一四
無精して居ると銅像が建つ……一一四
ふりまらで大弓……一一五
私の化物退治……一一六

俺れの書は頭山流ぢや……一三七
私の印は貰ひものばかり……一三九
私の若返り法……一三〇
もう一度四十才から出直したい！……一三一
俺れは馬鹿運が強い……一三二
敵を倒して其處に安全を求むる……一三三
富相破りの貧乏生活ぢや……一三四
猿眞似をすると不具になる……一三四
外國の憲法論で日本を論ずる間違……一三五

最近頭山翁に對する諸家の感想

卓然雲表に峙つ大山峻嶺の姿（細井肇）……一三七
全體翁のドコが偉いか（内田良平）……一四〇
翁と荒尾東方齋先生（井上雅二）……一四三
明治維新と大陸的帝國主義（白柳秀湖）……一四五
頭山先生の風丰（滿川龜太郎）……一四六
ユニークな存在（島中雄三）……一四七
現代の第一人者（小久保喜七）……一四八
その默せる大風貌（喜多壯一郎）……一四九
貫通三世對皇天（紫安新九郎）……一五〇
宗風擧揚の巨宗（田子一民）……一五一
無邊的偉大（菅原傳）……一五一
高潔なる隱者の命（清水愛山）……一五二
現代比なき人物（松岡正男）……一五四
まぢり氣のない人間（風見章）……一五四
仁俠・正義・豪放の權化（鏑木忠正）……一五五
作意なき生活（簡牛凡夫）……一五七
翁よ！　翁よ！（安藤盛）……一五八
究め難き大人格（竹内大三位）……一六〇
富士山と翁（猪之毛利榮）……一六一

頭山も男が廢つた（今村螺炎生）……一六一
翁の存在を高調せよ（福田有三）……一六四
仁者としての立雲翁（小松霞南）……一六五
一諾千金の人（荒川五郎）……一六七
頭山翁の言葉（平山　周）……一六八
富貴權勢雲の如き翁（石田秀人）……一七〇
鬼想遠大、臨機直斷（石鎭　衡）……一七五
闇夜の一燈（荒井金造）……一七六
頭山滿翁の人格（犬養　毅）……一七七
修養の人頭山滿翁（安達謙藏）……一七九
先憂後樂の人（田中義一）……一八〇
國家の重寶を私する勿れ（江口定條）……一八一
天下の債權者頭山翁（望月圭介）……一八二
金も名も命も要らぬ人（床次竹二郎）……一八四
空に聳ゆる老松（德富猪一郎）……一八五

雙柿舍から常盤松へ

（逍遙翁から立雲翁へ）

錦繪から名刀へ……一八九
曲線と直線と……一九〇
未見の知己？……一九一
相通ずる趣味の一點……一九二
共に筆を取る人……一九五
訪客からの耳學問……一九六
出來ぬ相談に乘つて吳れる人……一九八
文壇の總元締……一九九
立雲翁の机上……二〇〇
整頓と無頓着と……二〇一
放膽と神經質と……二〇五
鐵鎖も繫げぬばけもの……二〇六

共に浪人の一生……三〇八
世界の無冠王……三〇九
立雲翁の活動と逍遙翁の筆戰……三一〇
文學的良心……三一一
兩翁の憂國慷慨……三一三
巨人の相貌……三一五
相通ずる兩翁の心境……三一八
精神的劍難もぐり……三一九
南陽草廬の圖……三二〇
七世文章を作るの苦心……三二一
天下横行術……三二二
立雲翁の音曲趣味……三二三
東湖の再來……三二四
猫の頸に鈴を附ける人……三二七
天下取りの上乘なるもの……三二七
兩翁を一丸となさば?……三二八
後進に對する謙虚……三三〇

頭山滿翁の眞面目

頭山滿翁の眞面目

はしがき

獅子の口へ拳を突込む人、出來ない相談に乘つて吳れる人、これが頭山立雲翁の特色である。翁は無位無冠にして、歷代の政府を監視し或は頗使して來た人でもある。私はこれを國寶的存在と信じてゐる。で、私はかねてから、永く後世に殘るべき翁の閲歷談を編むことを發意し、これを立雲翁に進言し、同時に翁の最も親近關係に立つ濱地天松居士に圖り、また頭山翁夫人及び令息立助君にも囑して遂に翁の承諾を得、その一代の閲歷を作ることゝなつた。

翁自らいはく「俺れは無精者で、自分のことなど詳しい話をせぬから、自分のことを書いたものは大抵また聞きぢやらう。」と。

そこで私は一言一句翁の口唇を洩るゝものゝみを書き集めることにした。最初、此方から話題を提供して一ケ月もしたら、出來上るものと思ふたのが、座上客常に滿ちて用談に忙殺され且つ本來寡默なる翁の事とて、翁一身上の談は殆んどこれを聽くの餘閑なく一年有半の間翁の邸に日參同樣にして、やつとこれだけの材料を得た。正に之れ、牡蠣の中から眞珠を拾ふの思ひであつた。それだけこれは最も貴重なる、立雲翁唯一の直話である。若し之を敷衍したり、修飾したりしたら、一項目優に數十頁にもなりさうなのを、私は忠實に、翁の閲歷談を其儘に傳へて、其の眞面目を如實に現はし一言一句の間に、機微なる點睛の妙味を示さうと努めた。翁の座談は、飾らずして巧みに天眞流露を見る。以下翁の直話に移る。（編者記）

× × ×

是が、自分の身上話の初めてぢや

私は、無精者で、自分の事を話さうと言ふて話した事はない。七八年前玄洋社の者が、書きたいから話をして呉れと言ふたのを書かせなかつた。是迄、雜誌や、何かの本に出た私の閲歷に關した話といふのは、大抵復聞きぢやらう。私の事を書くからと言ふて斷りに來たのはあつたが、唯だそれ丈けの事で、私はそれに自身の事を話してやつたやうな事はない。私は何を書かれても構はん。唯だ天が眞實を知る。知己を天に求むるのぢや。……ま、然うぢや。是れが、自分で自分の事を語る初めてぢや。

私の兩親

「私の父はあれぢや」と、翁は、下座敷に揭げられた額面を指し示され、

「私の骨格は、父に能う似て居るやうぢや。がつしりしたものぢや。父は槍を使つた、免許を取つて居つた。それで、一方書畫を愛する事甚だしく、部屋一面にいろ〳〵のを掛けて眺めるのが樂しみらしかつた。

私が三十六歲の時ぢや。東京に居る處へ、父が重病ぢやといふ知らせがあつて、急いで鄕里へ歸つた。父は病床に横はつて居つたが、私を見て、「ほかへ連れて行け」と再三いふ。

私は靜かに抱へて床から起したが、抱へられたまゝ、モウ息が絶へた。七十六歲であつた。

母の方は、私が明治十年「大久保斬るべし」の宣誓書の一件で投獄、萩の牢屋へ幽囚の間に病歿した。病氣は胃癌ぢやつた。母は、貞婦として又慈母として、頗る犧牲の精神に富んだ質であつた。美

服を粧ふの、物見遊山、芝居見物などいふ念は更らに起さん様子ぢやつた。専心夫に仕へ、子を育てた。私の家は、年に八十四俵の祿高で、家計も豐かでない。一家七人で、世間體もあるから、母のやりくりは骨が折れたらう。それに、私の惡たれが手傳ふて、又一倍母の胸を痛めさしたのぢや。

「此子は、石川五右衞門になるだらう」と母は毎日嘆いたといふ事ぢや。

私は十六歳迄は五尺やつとで、友達よりは小さかつた。それが、十七の年に、一年間で五寸身長が伸びた。そして、其年からして、心機一轉して、人間が急に變つた。善良な方へ豹變したのぢや。其前は頭ばかり大きくて近所の子供等から「百舌鳥」と言はれた。

瀧田の塾へ入つた翌日、吉水とかいふ、其塾で一番大きい奴が、氣に喰はん事をいふから、拳固で兩方一緒に烈しく頭を撲つてやつたら閉口して了つた。他の奴等は、之を見て手出しするものもなくなつた。何時でも、俺れは向ふの大將の奴を先づやツつけるので、其餘の者は、戰はずして降參する。そんな事で、俺れは殷の紂王と呼ばれたものぢや。

十四歳志を立つ

私は生れながらの無頓着者で、一向物事を氣にしなかつた。人の物は我が物で、欲しい物は何んでも取つた。

それで、十四歳の時までは、我儘一杯な、厄介なやつで、母が「半日でも、他の子の如あると……」と泣いてをつた。他の子のやうにおとなしくあれといふ意味ぢや。

それが、十四歳の時豹變した。まだ寺小屋時代で、少しは物事が解つて來たのぢやらう。論語かの文句を讀んでそんな考へが出たのぢや。そこで、自分の事を考へて見て、「是は詰らんやつ」と思ひ、それから性行一變した。「兄弟の物など奪ひ取るは吝だ」と、發憤し、つまらん爭ひなどは、慾から起るから、この慾を切り捨てると、解決が付くと思つて、それから人間が變つてしまつた。その前は、兄など町へ出る時そつと隱れて出たものぢや。私がついて來るのをいやがつて、私がついて行くと、一旦家へ戻つて、私の氣の付かぬ間に出直すといふ風であつた。それが、私が志を立てゝ、たつた一日で兄弟の仲が直る。母が病氣すると愛宕様へ參詣して、身を以て代る様にと祈つた。母は、不思議に思つて喜んだものぢやつた。

本を讀む事は好きであつた

本など讀むことは、私は兄弟中一番好きで、記憶もよかつた。先生の話は口うつしによくやつたも

ので、輪講をやると一番出來がよかつた。三つ違ひの兄に勸めて本を讀ませた位だ。私の讀書か？春秋左傳あたりまでぢやつたらう、外史や靖獻遺言のやうなものは誰でも讀んだのぢや。父は放任主義で、自分を一番可愛がつた。私には何んの苦勞もなかつた。

獨りで淋しくない

そこで、わざと飯も食はんで、身を苦しめて見たり、山中へ入つて仙人の稽古をするなんぞと、好んで苦勞をして見た。側から見たら、私は浪人者故、不遇と思ふだらうが、不滿も不平もない。第一私は退屈するといふことのない人間ぢや。獨りで淋しくない。大がいの者は獨りでは淋しがるが、私は何んともない。兄が今もいふ。

「お前は子供の折から一人で淋しくないといつたが、今に然うだ」と。

私は兎に角、生得仕合せに出來た。幾度も、殺されるやうなことをしても、自分はかすり傷も負はない。運が強いといふのぢやらう。人が心配をするやうな冒險に興味があつた。

第一回の死損ひ十一歳の時

十一歳の時、私は、死損ひをした。

鄉里に金龍寺川といふのがあつて、能く泳ぎに行つた。水泳は大好きで年上の者よりは上達して居つた。それで或時、二歳年上の友達と一緒に泳ぎに行つた。友達は泳ぎが出來んので見て居るから、私は無理に引き込んで一緒に泳がせた。其處は川の洲口で、海へ入る處だから急に深くなつて居る。出來ない兒に抱き付かれて、いくらあがいても沈んで行くばかりぢや。

之は堪らぬと思ふと、私は、手を振り解いて自分丈け陸へ上つた。振り顧ると、其兒は溺れかゝつて悲鳴を擧げて居る。

「是はいかん。俺れが引入れて置いて、危險になつたからとて自分丈け助かるといふは卑怯ぢや」と思ふと「仕方がない、此奴と一緒に死なう」と決心をした。

そこで、強ひて生を願はぬと云ふ氣で、又其の深みへ入つて行つた。其兒を抱へて救ひ上げやうとするが、自分より大きいのが、必死に抱き付くのでどうもならん。又沈んで行く。併し、責任を負ふ覺悟を定めて入つたのぢやから、敢て恐れん。度胸が定まり、人事を盡くして終らうと云ふ心だ。

頻りにもがいて居ると、一寸足の先きが砂に觸るやうに感じた。之に力を得て、モ一息身を動かすと、淺い處へ出た。それで漸く二人共助かつた。すると、其兒は無理に引入れられた怨みも忘れて私

に抱き付いて喜んだ。

いたづらをして私も大いに後悔した事ぢやが、之れで死生の呼吸も覺えたやうな、えらい學問をしたのぢや。

少時私の讀書法

私の讀書法は、氣に入つた處丈けを肚へ入れる迄熟讀したものぢや。十八史略を讀んで、禹が江を渡る處で、黃龍現はれて舟を覆ふ條下で、禹王が泰然として「生は寄なり、死は歸なり、龍を視る事蜒蜒の如し」とかある處で、

「此處だ！」と考へて其時の禹王の心持になつて見る。

又、項羽が始皇の巡狩の行列を見て

「取つて代らん」と目をいからして進み出づる處を讀むと、

「之れだ！」と、又項羽の肚になつて、其の勇氣の勃々たる處を考へる。項羽は快男子ぢや。事成らずと雖も、男子として堂々たる一生ぢや。

己れは泣かぬ兒であつた

客「私が外國に居つた時、其家の主人が旅行に出て細君が留守をする。夜になつて、淋しいから、私に細君の室へ入つて話でもして呉れと言ひます。私はそれはいかんといふて、自分の室へ鍵をかけてゐると、細君は淋しいと言ふて子供の様に聲を揚げて泣き叫ぶので、驚き呆れました」。

翁「世界中、泣かないのは日本人ばかりぢやらう。何處の國でも、大人が聲を放つて大いに泣くと書いて居るやうぢや。私は幼少の折、母に物をねだる時の外は、聲を出して泣いた事はなかつた。外では決して泣かなかつた」。

二度目の死損ひ

今度は二度目の死損ひぢや。

私は十七の時、龜井紀十郎の塾へ入つた。龜井は其時四十位で、私に碁を教へて呉れたのは此人ぢや、年は親子の差ぢやが、私は直き碁が上達して先生よりはずつと強くなり、先生は折り〳〵私の家へ來ては碁を闘はしたのぢや。

此の龜井先生、間もなく、熊本の縣廳へ勤める事になつた。それは、自分の門弟ぢやつた安岡が、熊本の縣令になつて其手引きで熊本へ行つたのぢやないかな。そこで龜井先生、今度は私にも勸めて熊本の縣廳へ入れといふ。疾くに、安岡縣令と話を付けてあるといふのぢや。縣令も喜んで、私は碁が強いから、よい相手が出來ると思ふたらしい。其頃の士族は祿を離れて難儀の時代ぢや。今日よりも一層に官吏熱が烈しかつた。私にしては願ふてもなき幸運といふべしぢや。

併し、私は衣食渡世の事などは更らに考へなかつた。

「碁の相手ならするが、官吏の御相手はせん」といふて、私はにべもなく斷つたものぢや。龜井も安岡も呆氣に取られたぢやらう。私の親達も折角の蔓を此方から切り棄てるのを惜しいと思ふたらう。

處が、其年ぢや、あの神風連の騷動が起つたのは。鎭臺を襲ふて種田を斬る、縣廳官舍が襲はれて安岡縣令も斬られた。若し私が縣廳へ入つたら當分は安岡の家に居るやうにと定められて居たといふのだから、私の氣性としては、安岡と死を俱にした事であらう。ま、惡運強く難を免れたのぢや。

其後十年戰爭の時も婆婆に居たら、西鄕と事を俱にしたであらう。幸ひに天は我輩を牢へ入れて保護して呉れたのぢや。同志の宣誓の中に「大久保斬るべし」といふ一ケ條が書込まれてあつたのを警察に擧げられて、牢へ入れられたのぢや。そして二度目の死損ひをした。却て大久保は、我々とは關係のない島田一郎に斬られた。

俺れの箒賣り

俺れは箒賣りもやつた。兄が箒を作つたのぢやが、俺れとは全然氣風が異つて、正直なおとなしい人間ぢやから、町へ出て之を賣りに歩くなどは出來ない。そこで俺れは箒を何十本か束ねて、福岡の町へ觸れ賣りに出た。

其箒を賣るかといふ者があるから、勿論賣る爲に持つて來た。併し、皆んな買ひ取らんかといふと、夫れは困る、一二本あればよいといふから、それでは、後を舊の通りに結ひて呉れるなら賣らうといふ相談が出來た。

こんな我儘な商賣がどうにか形が付いて、皆んな賣つて戻つた。

俺れの碁將棋は眞劍だと強くなる

二度目の鹿兒島入りの歸途ぢやつた。川口雪蓬や、河野主一郎などに會ふて來たのぢや。其の歸りに、加治木へ立寄ると、道路から直ぐ見える店先きの樣な處で碁を打ち居る。私は立留つて見て居つ

たら、何時迄も見て居るもので、彼方で、
「お前さんは碁をやりますか？」と問ふ。
「お前達位は打てやう」といふと、
「そんなら一番願ひませう」といふので、向ふが白を取る。
「田舎の碁打が、そんな我儘をするものでない」と私は吐つて、「握りで行かう」といふ事にした。
私は白になつて、打つと、うんと勝つた。二番やつたが彼奴又負けた。口惜しがつて、町で一番強いといふのを連れて來たが、之も駄目ぢや。まるで、相手にならん。
「あなた樣は初段で御ざいませう」といふ。私は加治木初段になつた。
碁は十三歳の時、鄉里で覺えた。近所の老人が毎日碁を打ち居るので、習つた。間もなく其老人を負かして、五ツも置かせるやうになつた。
後、玄洋社で、かけ碁をやつた事がある。牛肉屋とやつたのぢや。元は士族で相當の人間ぢや。それが牛肉屋を開業して繁昌して居つた。
「貴樣が負けたら、玄洋社の者へ牛肉を御馳走せ」といふと、
「宜しい」といふ事で、私が負けたら、自腹を切つて牛肉を買つて皆んなに振り舞ふ事にしてやつた。

平生は、此男は私へ五目置くのぢやが、
「今日は眞劍ぢやからせい目で來い」といふて、せい目でやらせた。
處が、不思議と私が勝つ。何度やつても私が勝つた。
私は、妙に眞劍となると強いので、十七ばかりの時賭將棋をやつた事がある。兄が他の者と將棋をさして居るが、どうしても勝てぬ。そこで私が代つてやつた。私は兄よりも碁なら強いが、將棋はずつと弱いのぢや。處が此時、其者と、對でやつて勝つた。彼方はどうしても勝てない。
後に、東京へ出て、總理など訪問の時でも然うだ。此方は生一本の眞劍で打つかつて行く。何んのわだかまりもないから強い。彼方は、何か胸の中に弱點があつて、びく〳〵して居るやうぢや。賭碁の時も、私は最初から覺悟を定めて、牛肉を皆んなへ奢ごるのぢやといふ肚でやると何んともないのぢや。

生れながらのだゞくさ者

「私の豪傑修業か！」
何にも修業はせん。生れながらのだゞくさ者ぢや。無頓着に思ふまゝを振舞つたまでぢや。先輩の

激勵だの、鼓舞だのといふこともない、人參畑の塾へ行く前に、モウ私はこんな人間に出來上つてをつたのぢや。私が人參畑の婆さんの高場塾へ入つたのは二十歳ごろぢやつた。そこには、先輩格で宮川太一郎――今の宮川一貫の親父ぢや――それ等がをつて、宮川は、私に、年は幾つだといふから、二十だと答へると、

「何に！　戊辰ごろの二十歳だらう！」と宮川はいつた。

宮川は私より七歳も年上ぢやつたが、私はそれと同年位に見えたのぢやらう。顏は老成してゐたのぢや。一番年下で皆んなから苦しめられるべき方なのだが、そんな事で、一度も苦しめられなかつた。宮川など身體も大きく力も強かつたのぢやが、私を年下扱ひにはしなかつた。

仙人修業の三年

私の仙人修業は、三年ばかりぢや。「大久保斬るべし」の覺え書が役人らの手に入つた爲に、同志十餘名と福岡の牢屋へ入れられる少し前まで、私は山へ入つて仙人になつてをつたのぢや。二十歳後の事ぢや。私の家の山ぢや。そこに番小屋のやうなものがあつた。私は其處に寢て、何んにもせんで、仙人になるつもりでをつた。飯は炊いて食ふが、それも面倒ぢやと、七日位は食はずにゐる。お菜は

一年も通して梅干ばかり食ふたこともある。延べ勘定にしたら、この仙人修業は三年位はあつたらう。何んの慾もなかつた。美味いものを食ひたいなどいふこともなく、無慾恬淡の修業にはなつた。また艱苦に堪へる修業にもなつた。獨りでゐて淋しくない方の修業にもなつた事ぢや。私は酒も煙草もやらず、女などの事は思ひもしなかつた。死ぬるも生きるも同じやうに思うてをつた。その中、世間が餘りごた〳〵するやうぢやから、仙人でも居られんと思ふて、また山から里へ出て來た。それで矯志社といふのを設けて、今度は、世の中を改良してやらうといふ考へぢや。する中に「大久保斬るべし」の宣言書が見付かつて牢屋へ入れられた。十人ばかりの同志が擧げられたのぢやが、牢屋で苦しがらんのは私ばかりぢやつた。仙人時代よりはずつと氣樂ぢや。懷手をしてゐて、三度々々の御馳走が運ばれて來るし、梅干のお菜に比べたら牢屋の辨當は大した御馳走ぢや。それで大勢の仲間が一緒だし、風の變つた他の者も雜つてゐるし、面白い倶樂部ぢや。とんと別莊にゐるやうなものぢやつた。

平野國臣と近藤勇

私は、直接誰の指導を受けんでも、間接には、鄕里の先輩の事など考へて發憤もした。平野國臣などの事は、よう知つて殘念に思ふた。平野は、大いに遣れる筈であつたのが、時と處とを得ずして急

にことを擧げて成らず、一敗地に塗れた事情など、實に殘念ぢや。

「平野は二十人力の大男で……」などゝ、何時か、本人を見たことのない者共が話してゐるのを聞いてをかしかつた。

平野は小男の方で、小男の英雄豪傑も少なくないのぢや。平野は一見溫順であつたがなか〳〵武藝は出來たのぢや。

何に？……近藤勇も小男ぢや？……否や近藤はさうぢやなからう。先年、盛岡で、知人の處で、近藤勇の寫眞を見たが、がつしりした、立派な體格であつたやうぢや、眞劍になると、中々強いもので、平生の稽古の時とは別人の樣に見えた樣子ぢや。

有馬藤太が話に、

「近藤の前に出ると、その落付いた、研ぎ澄した刃のやうな姿には壓されるやうで、私も戸惑まらなかつた」といつてゐた。天成の剛膽者のやうに思はれる。

平野などは、同鄕の先輩でもあるし、非凡な豪傑でもあつたし、それがあんなことになつたもので、私は殘念に思うてをつた。その他にも越智（彦四郎）武部（小四郎）など、一期前の同鄕の先輩がをつた。また箱田（六輔）も年上ぢやつた。しかし、これらは、私が一人前になつてから交渉を持つたので、少年時代にその感化影響を受けるといふやうなことはなかつた。私は昔から獨立獨歩、一人で勝手に、持つて生れたまゝを振舞ふたまでぢや。

（翁の長兄箇井龜喜翁も言はれた「滿は幼少の折から變つてゐました。あれは生れながらの無頓着で、度胸者で、自制力も强く、斷行力もあり、普通の人には出來ないことをやりました。頭山家の血統には、そんな類の豪傑風なのは更にないので、祖先以來あんな風の人間は一人も出なかつたのです。誰の影響感化を受けたといふこともなく、生れながらの變り者です」）

平岡は行儀がよかつた

福岡にゐるころ、私は玉子燒といふのを初へ入れて食うて歩いた。平國（浩太郎）は、博多織の羽織など着て洒落れてゐた。英姿颯爽といふ風であつた。兩人連れ立つて行きながら、私は玉子燒を出して食ふ、平岡は、

「こら〳〵、さういふものはしまへよ」

と小聲でいつて留める。私は、玉子燒を出して、

「貴樣も食へよ、うまいぞ」

と突き付けると、平岡は、聞かんふりして、離れて行く。行儀がよかつた。

洋服着て平岡と寫眞をとる

三十歳前後の時ぢや。平岡が私に洋服を着せて見たいと言ふ。そして一緒に寫眞を撮らうといふのぢや。

そこで、或日平岡が案内をして一軒の洋服屋へ出かけた。懸けで作るのだから、現金は要らんといふから宜しい作らうといふて注文をした。平岡は案内した丈けで、注文は私がしたのぢや。そして二人で寫眞を撮つた。

後、來島が大隈をやつ付ける時着て居た洋服も其の洋服屋で作つたもので、今度は私が錢を出してやつたのぢや。來島は「之れは餘り善過ぎます」と言ふて恐縮して居つた。

それが彼れの死を飾る晴着となつたのぢや。

江藤新平の擧兵

明治八年に、江藤（新平）は佐賀で兵を擧げたが、事成らず一敗して同志離散し、潜行して土佐へ落ちて行つた。もしあの時、土佐の議論が一致してをつて、板垣や、林（有造）などが團結してをつたら、或は彼らは江藤を援けて立ち上つたか知れんのぢやが、それが出來なかつたので、江藤も浮ばれんであつた。氣の毒な事であつた。

林有造は、大西郷の擧兵に應じて起つ丈けの準備をしてをつたといふので、片岡とは餘ほど段違ひの者であつたらしい。

正直者前原一誠

前原一誠は、これも正直者で、大久保一派に反對して、賊名を取つたことは可憫さうなものぢや。あれは、明治九年の十月ぢや。その折り伯父さんかへ送つた手紙といふのは、言々人を動かすもので私は今でも暗誦してゐる。それはかうぢや。

「忠謀破れて賊となり、恨を呑んで九泉に歸る、實に畢生の遺憾なり。豐田の死生未だ知らず、憐むべきなり。僕等兄弟三人、實に心忠にして形賊なり。唯千載の公論を待つ。且つ僕等なほ未だ死せず、千辛萬苦、野に伏し山に伏し、北海の波に漂うて後圖を謀らんと欲す。事遂げずして死せば天命なり、老兄幸に我等が心中を御賢察給はるべきなり。頓首一誠」

然うぢや、私は、地獄耳で記憶はよかつたのぢや。七歳の時、父と兄と一緒に扇屋といふ寄席を聽きに行つた事がある。井伊大老が斬られた翌年で、櫻田銘々傳を語つてをつた。私がそれを能く覺えて歸つてから、手眞似までして話して聞かせて、家の人を驚かしたことがある。

それから、前原が、賊名を蒙る前のことぢやが、最初征韓論が成らず木戸と合はずして朝を去る時の「辭」といふのもあつた。それも今に暗誦してゐる。

「未だ彈丸矢石の間に出沒せざる兒等、時に乘じて跋扈跳梁す。西洋事情を師として、專ら國勢を弄す。國家果して富むべきか、兵力果して強うすべきか、風俗果して篤うすべきか、人民果して安かるべきか。我未だその停止する處を知らざるなり。我れ、此輩と朝に在つて國を賣るの誇りを得んよりは、寧ろ勇退して後圖を成さん」

江藤でも、前原でも、あのころ賊名を蒙つた者は、正直者が多かつた。

（翁の二十歳過ぎ、血氣盛りのころには、九州が日本の本舞臺の觀があつた。第一に天下の大立者、大西郷が、征韓論敗れて後、鹿兒島に退隱する、板垣は土佐に還る、江藤は佐賀に、前原は萩に引き込む。全國人の注意はこれ等の人々の上に向けられたのである。そのうち明治七年の二月、江藤新平先づ佐賀に亂を起して失敗し、九年十月には前原一誠また萩に兵を擧げて失敗したのである。

しかし薩南の健兒は負嵎の虎の如く大西郷を擁して控へてゐるので、政府ではいよ〳〵神經を尖らし、頭山翁一派の組織する矯志社の家宅捜索を始めた。すると、社の盟約書の中に、いろ〳〵と過激な文字があり、殊に「大久保斬るべし」といふ一ケ條があつたので、これを證據物として、翁以下の社員一網打盡投獄の身となつた）

私の獄中生活

私の入獄は、最初は福岡の牢屋で、西郷の戰爭が始まると、萩の牢屋へ移された。判決は受けず……さうだ、その未決のまゝで一年居つたのぢや……さうぢや政府の方では我々が自由の身でゐると、何を仕出かすか知れんに依つて、園ひの中へ入れて置くつもりであつたらう。十人も同室へ入れて置いた。

その中に盜人が二人交つてゐてね、私の事を先生様といつてをつた。彼奴がいふには、先生様が最初こゝへお入りになつた時には、餘ほど腕の良い親分が來たと思ひました、といふのぢや。何んでも私の事を同じ盜人くらゐに考へたのぢやらう。そいつ中々利かん奴で、そんな惡人らしくもなく、役に立ちさうな者であつた。貧乏者へは惠んでゞもやる方の盜人であつたかも知れん。私共のゐる間、

卑怯な眞似もしなかつたやうぢや、萩の牢屋では、私共は十人も同室ぢやつた。その盜人の奴共が賭博をやつて、わつぱを賭けるのぢや。飯を入れるあの曲者ぢやね、わつぱといふのは。すると、その負けた奴は、飯ごど、わつぱを取られて了ふ。取つた奴が、私の處へ持つて來て、先生様に差上げるといふのぢや。他に樂しみもない牢屋で、飯を取上げられる奴が可愛想ぢやから、そ奴にやれといふと、それでは、折角の賭博が面白くありませんといふ。

入獄した同志は、皆元氣であつたが、一人だけチブスに罹つて病死した。助からなかつたのぢや。私は、牢屋の中だつて退屈もせん、ぢつとしてゐられる。仲間は皆退屈がつてをつた。……今に生き殘つてゐるのは無いやうぢや。そのころの私は、ひどい生活をしてゐたもので、牢にゐる方がよツぽど良い生活ぢや。平生は着物だつて汚れてゐるし、まづい物ばかり食つてゐる。無ければ何日も食は ん位ぢやつたから、牢屋にゐる方が上等なのぢや。

入獄中母の訃音

その中、母親が死亡した。それで、私はわつぱ飯の上に載せてある魚を、そつくり、仲間の奴へやつて、五十日ばかり精進をした。それから墓參りをする位の路程を測つて、毎日牢内を往つたり來たり歩いた。病氣も何もせん。その前にも、何日も〳〵飯の菜に梅干ばかりを食つたりしてゐた位で、牢屋は極樂であつた。

（前に出た、翁の一期前の先輩、越智、武部等は、翁が入獄中、西郷の擧兵に應じて、同志數百人と、福岡に兵を擧げたが、忽ち敗れて、斬罪に處せられた。その中、西郷以下薩南の健兒多く城山の露と消え、征韓論破裂以來、九州の天を蔽ふた暗雲も、こゝに一掃されたのである。そして、翁また赦されて出獄の身となつた。出獄後間もなく、翁は鹿兒島に赴いて西郷の遺靈を弔ふた）

南洲の師友川口雪蓬

私が鹿兒島へ最初行つたのは、西郷の戰爭の後で、私は二十五歳であつた。鹿兒島では、西郷に殉じて壯士八千皆んな命を捧げた後だから、役に立ちさうなのはをらん。川口雪蓬といふ老人が、西郷の遺族の世話をしてをつた。その時、モウ七十位の老人で、白髮頭で、それで、可なり肥滿つて、威嚴のある人であつた。豪傑肌の男で、嚴重な、威力のある堂々たる風采で、西郷夫人でも叱る勢ひぢやつた。況んや、その他の者は、一喝されると縮み上つてをつた。西郷より十歳も年が多かつたらう。何んでも、西郷が大島三左衞門と名乘つた、あの大島へ流された時、同じ配所で友達になつた人間

で、學問もある、西鄕の師友ぢやつたらう。それが大鹽中齋だらうといふ噂まであつたのぢや。年齡からいつて丁度はまるのぢや、……然うぢや、鬼一法眼のやうな顏ぢやつた。……俊寬僧都が鬼一法眼になつてゐるかね。然うか、大鹽が川口雪蓬になると好一對ぢやね。雪蓬は、南洲の死後、遺族を見とつてゐた。その前から家政を預かつて、西鄕の妻子の敎育や取締をしてゐた。

本も讀んだし、書も達者で、人が西鄕に書を賴むと、「何に、私が書いてやる、私の方が上手ぢや、ハヽヽヽ」といつた氣合ひの豪傑であつたといふ。德川氏の奉じた朱子派の學問をする者を不具學者と嗤つて「溫良恭讓讓」の不具がと罵つてをつたやうぢや。

私が、川口から、西鄕の愛讀したといふ、洗心洞劄記——大鹽の著書ぢやね、あれを川口老人から借りた。川口は、モウ大木が皆切倒されて、鹿兒島は何にもありませんといひをつた。例の桐野などは猛烈なもので、孤軍奮鬪圍みを破つて故山に歸つた時も、にこ〳〵して少しも屈托する色もなかつたといふのだからえらい。あれは鹿兒島でも第一等の强い者で、かつて廟堂に列した時、皆んなで大議論の折り「木偶長袖の輩何をかせん」と大きな聲で怒鳴つたといふので、その席には西鄕も居つたのぢや。すると岩倉が、色を作して「木偶長袖とは誰を指していふ事か」と咎めた。聲に應じて、桐野は「貴公らの事ぢや」とやつたには、岩倉も齒が立たなかつたといふ。何んでも桐野らの肚では、岩倉などの軟論者を退治して、新政局樹立を手取り早くやつて了ふはずであつたらしい。西鄕が止めてやらせなかつたのぢや。こんな桐野以下、逸見十郎太、篠原、別府など皆城山で斃れた後だから、暴風一過、根こそぎ何にもかも吹き飛ばされた形で、人間はをらん。川口は、西鄕の留守宅を世話して、戰爭には與からんのぢやから、政府では何んの咎めもない。私の行つた時には、全くの世捨人隱居で遺族を見取つてをつた。

私は、その洗心洞劄記を一寸見せてもらつたのだが、そのまゝ默つて持つて來た。すると私と一所に行つた松本が同じ宿にゐるので、

「川口は恐ろしい人間だから、大切な本を默つて持つて來てはいかん、そればかりは止せ」といふ。私は、

「そんな事は何んとも思はん。兎に角見せて貰ふつもりで出して貰つたのだから、持つて歸つてゆつくり讀んで宜しい。貴樣がそんな心配せんでよい」といつて、無斷でたうとう福岡へ持つて歸つた。

それから、東京へ出て、東北漫遊——ぼろぼろの服裝で跣足で無錢旅行をやつたのぢや。その間も、例の洗心洞を風呂敷包みにして離さなかつた。東北旅行から歸つて來ると、中島翔が大變心配して、

「川口雪蓬が非常な憤り方ぢや」といふ。

默つてその本を持ち歸つたから、その後行つた筑前人は、皆なひどく川口に叱られる。頭山といふ奴は不屆至極だから、腹切らせると憤つてゐるさうで、眞藤なども、大變心配してゐるといふ。私は、それを聞いて、

「然うか、モツと憤るやうにしてやらう」と、だゞくさな手紙を書いて雪蓬に送つた。その文意は洗心洞劄記を見せてもらつたが、あれは表紙を見る爲でなく、熟讀するつもりであつたので、貸したのなら默つて貸ツぷり好くして、見て居たら可からうといふやうなことで、禮はいはずに、モツと憤る樣な手紙を郵便で鹿兒島へやつた。

二度目の鹿兒島入り

その翌年、私はまた鹿兒島に行つた。川口雪蓬を訪ふ。私は、洗心洞劄記のことは、おくびにも出さんで、他の話をしてゐた。今に川口が何んといつて怒るかと見てゐたが、向ふも何にも言はん。私は「友人共が、あなたの書を賴んでゐたから書いて下さい」といつたら、此方では紙も持つて行かないのに、他の依賴者の紙へ七枚書いて呉れた。彼れ是れ、三時間も話をして、モウ歸らうかと思ふころ、川口はにこにこ笑つて、

「洗心洞は熟讀になりましたか」といふ。私も笑つて「あなたが、中程で催促をされてをられるといふから、お返事を先日差上げたやうな譯です」と答へる。

「あれは、預かり物でございましたから」と、川口の方で詫びて御機嫌でゐる。

それから、山崎闇齋が註をしたとかいふ、靖獻遺言を、川口が立派な美濃紙へ寫したのと、陽明文粹といふのを奥から持つて來て、

「これは私の物ですから」といつて私に呉れた。

そのころ、私は左手の中指を切つたのが、まだ癒らんので、雪蓬は、それを氣遣うて、

「お身體が大切ですから、鹿兒島の病院に能く診せたら如何です」と言つて居た。

憤るどころか嬉しがつてゐた。

ナニ？　この指を切つた譯か。これは女が呉といふから、臺の上へかう載せてポンと切つたのぢやつてゐると、過つて左の指を切つたのぢや、落ちるほど切れたのぢや、それを布片で結んで置いてほど經て見ると、一つ捩れてゐるのぢや、之は駄目ぢや、却つて邪魔になる、何かする時工合が悪い。…ハヽヽ。それは些と怪しいかね。さうぢや、本當は福岡にゐて、兄などゝ一所に竹を切つて何か作そこで、敷居の所へ載せて鉈刀で切つた。鹽を一握り用意して置いて、それを附けたらよからうと思

つたが、動脈を切つたので鹽位で血が止まらん。眞藤が來て、それはいかん、醫者にかゝれといふ、それでも、血が黑くなつて塊まつた。私は不死身ぢや、血が强いから、大がいの傷ぐらゐは癒る。

この時鹿兒島へ二度目の出張は、本當の用向きは、川口雪蓬よりは河野主一郎に在つた。河野は逸見十郎太とは兄弟のやうな仲で、驍武無雙といはれたのぢや。それが西鄕の城山退却の時、助命のために出京し、引留られて城山へ歸れず福島で懲役をしてをつた。そこへ私は前年東北漫遊の折り、河野廣中の家に半月ばかり遊んでをつて、河野主一郎に會ふた。監獄にゐる懲役でも、そのころは人の家へ來られたものぢやつた。そこで、廣中の家に呼んで主一郎と三人大いに語り、食ひ、樂しんだ。その時河野主一郎に約束をして、「お前鹿兒島に歸つたら知らせよ、私は鹿兒島へ出かけて話をする」といつて置いたのが、いよ〳〵今度歸つた通知があつたから、私は出かけたのぢや。

河野主一郎は起たなかつた

その頃は、私は何んでも面白い時代で、强い物へ打つかつて見たい、途方もない事をやつて見たいといふ氣が一杯ぢやつた。危ない事もやつた。三十まで生きるとは思はなかつた。それで、今度河野主一郎と鹿兒島で會うて、驚天動地の仕事をやらうと思つた。前年、福島で會ふた時、河野は、いざとなつたら、私の手で二萬人は集められますと言ひ居つたのぢやが、この時、河野は一時間ばかり手を組んで物もいはない。そして「私にはこの御相談は出來ません」といつた。私の大仕事も之れで中止されたのぢや。

大珍物の洋傘

この二度目の鹿兒島入りの時、大珍物を畫いた洋傘がはやつたもので、たゞ白くてもをかしくないから大珍物を畫いたのぢや、それをまたさして歸つた。よほど後まで殘つてをつた。

私は健脚で、この鹿兒島行きに半日で十里餘もかけた。一所に行つた者が足一面にまめを出かしたり、つひには足が棒の樣になつて曲らなくなつて顏色まで變つてをつた。

氣位ひは何時も大名ぢや

鹿兒島の歸途、加治木で碁を打つて大いに勝つて、「貴方は初段で御ざいませう」と言はれた事は前に言つた。

加治木初段にされて引揚げて三角から船で長崎へ廻つた。有名な料理屋油屋と言ふのがあるといふから、行くと、之は長崎第一等の店ぢやそうで、玄關で斷られた。

「今日は客が一杯でございますから折角で御さいますが」と、惡魔拂ひぢや。

其筈で、田舍初段の大先生も、ひどい服裝で乞食同然なのぢや。

止むを得んから、

「併し、茶を一杯呑む位はよからう」と言つて、私は店先きへ腰かけた。

歸らうとして、茶代十圓出したら、急に樣子が變つて、二階へ上げる。下へも置かぬもてなしぢや。

……然うぢや、其頃の十圓は一寸役に立つたものぢや。私の懷中も、それきりであつたやうぢや。一文なしでも、氣位丈けは何時も大名のごとあつた。

大久保暗殺の報

大久保が、島田一郎に殺られたと聞いた時、私は家で百姓仕事をしてをつた。

「是は、板垣が起ち上るかも知れん」と思ふた、直ぐ兄の處で十圓借りて土佐へ出かけた。

その時、土佐の鏡川の橋の上に寢たら、寒くて夜中眠れなかつた。十二月の二十五日に袷一枚で出かけたのぢや。朝見ると髪に霜が付いてゐた。野宿もいろいろあるが、野に伏し、山に伏す位は常住の事で、戸板へ寢る、梯子の上に寢るのが一番寒いといふ事ぢや。

（翁は、板垣退助が、大久保暗殺人心動搖に乘じて兵を擧げ、西鄕の遺志を繼ぐものと見て、土佐へ出かけたのであるが、板垣は西鄕さへも成功しなかつた以上、最早腕力で天下を爭ふことは出來ねと考へ、この上は言論の力で爭ふ他ないといふ。それから翁も腕力を思ひ止まり、爾來言論によることにし、福岡に歸つて、新聞を興し、また玄洋社を組織して、青年を養成し、以て他日雄飛の素地を造つた。）

土佐の民權婆さん

それは、土佐へ行つて居た時ぢや。板垣が民權を盛んに唱へたのぢや。すると、土佐で民權婆さんといふ女の豪傑が出た。獨身者で、私が其の女の處へ宿を取つて居た。板垣などが、あの家に泊つて居るがよからうと勸めるものぢやから、私も錢もいらず泊つた。すると、其の女が夜私の床へ入つて來る、恥を掻かせては濟まん事と大いに義理を立てゝ奮闘して其女を討死させたのぢや。却々、只の女ぢやない。其時四十五六ぢやつたらう、土佐の知事をして居つた渡邊國武をやり込めるといふ剛の

者ぢや。何かの事で、渡邊に言ふと、渡邊はそんな事は西洋にもないからといふ。お前さんは日本人でありながら西洋にないから、せんとは不都合な事をいふ。日本人でないのかと、散々やり込められたといふ話ぢや。

そして、自分が一人で、親戚から女の子を貰つて、婿養子を迎へやうといふのぢや。私に養子に來いといふ。それは結構な話ぢやが、金も其頃で二萬もあるといふから今では十倍に當るだらう。ぢやが「私など磔刑になるか打首になるか知れたものでない。二萬や三萬有つた處で、直ぐ無くして終はう、其の話は止めぢや」といふと、婆さん考へて、

「お前さんならやりかねまい、お前さんには叶はんよ」といふのぢや。

私は、女には緣が有つたのぢやが、併し、此の民權婆さんがなかつたら、私は酒も煙草ものまず、一生放蕩もせずに終つたかも知れんのぢや。

東北無錢漫遊

私の東北漫遊談か。乞食旅行ぢや。跣足で半年も同じ着物で行くのぢや。それでもあの頃は俠客仲間が、次ぎ〳〵と渡つて泊り歩く話と同樣ぢやつた。行く先き〳〵でどうにか泊る處も出來て廻つたのぢや。東京から行つて、福島では前にもいつた通り、河野廣中の處に半月ばかりをつた。佐藤清とかいつて、土地の新聞の社長の家に河野が口を利いて泊る事にした。その家の二階にゐるのぢやが、どつちが居候やら判からんことになつて、佐藤が大いに弱つた樣子であつた。私ほどの遠慮知らずの無頓着者はないのぢや。

仙臺に三日

それから、仙臺では、若生清一郎とかいつた男の處に泊つた。この男は有力者であつたのぢやが早死をしたので、中央に名が知れずに終つた。それから村松龜一郎といつた有力者もゐると聞いて行つたのぢやが、是は旅行中不在であつたのが、後で庄內の酒田で圖らず會ふた。仙臺には二三日しかゐなかつた。

弘前で木戸御免

弘前では二日ばかり泊つた。菊池九郎の世話になつたといふ。大火後の景氣直しの博覽會ぢやと聞いた。博覽會は切符を買はなくては入れんといふ。私

は「菊池に用があるのぢや」と番人へ申し渡して入つた。その前に橋錢も只で通る。とんと無錢飲食の格ぢやね、氣狂ひみたいに思つたらう、默つて通したのぢや。

黒石町で演説で飯が食へた

その前に、弘前から三里南の黒石町へ行つた。之は弘前の津輕家の支藩の城下町ぢやつた。當てもなくこの町に入つて一夜寢る處を見付けようと思うて行くと、學校がある。飯食はうと思つて、入つて行くと、先生達が十餘人ゐる。夫れを集めて私は演說をした。すると大喝采で、一モ一回やつて下さい」といふ。またやると、料理屋へ連れて行つて御馳走した。

私も演說で飯が食へたのぢや。

それから秋田を素通りして、庄內へ入つた。その夜は、八幡樣の緣に寢て、翌日、松本一郎に會ひ、森藤右衞門を訪ねたら、旅行不在といふことで、老人が、若者と圍碁最中ぢや。私は跣足の儘、立つてその碁を見てゐる。その老人は、森藤右衞門の親父さんで、私に碁をやるかと問ふ。私は少しは知つてゐると答へると、

「そんなら、藤右衞門がをらんでも兎に角お上りなさい」

といつて足を洗はせる。私は室へ上つて直ぐ碁を打ちはじめた。老人弱くて相手にならん。五目置かせて丁度よい。若い方の男も五目ぢやつた。聞くと、これが、仙臺で訪ねて旅行中といつた松村龜一郎ぢや。奇遇を語りなどして、翌日は酒田第一の豪家といはるゝ本間など集めて、私の爲めに觀迎會を開く。三日程御馳走になつて、毎日碁をやる。

「何時までもお遊び下さい」といふ事で、碁が宿料になつた形ぢや。面白い無錢旅行ぢやつた。

越後では、高橋、三浦、大楠某などいふのが居つた。私は三、四十日泊つた。この高橋は勤王家で、學者で、舊幕府に睨まれて牢に入つたこともある。その後、長岡へ出て來たといふのぢや。私はそれから會津へ出て歸京した。越前の方へ行つて杉田を訪ねたのは、それから五六年後のことであつた。

私の碁は、十七、八歲の時からは別段稽古もしない。あれで、强いのへ打つかつてゐたら、モツと上つたらう。そのころも今も同じぢや。私の碁は、無茶に多くやらん、晩も十時後はやらん、徹夜などいふことはなかつた。

端坐、漢學先生を凹ます

私が此の無錢旅行をして越後に行つた時、新潟在の杉の森といふ處に一ケ月ばかり逗留した。其處

には、高橋竹之助といふのが居つた。漢學者で、頗る嚴格な人物ぢや。夜は十二時に寢て、朝は五時にはキチンと起きるといふのぢや。私はそこへ泊つて、十二時過ぎ、高橋が寢てから臥床へ入る、朝は五時前に起きて、寢相も見せない。一夜二夜は眠らなくとも何んともなかつたのぢや。

すると、七日目になつて、高橋が、私に、

「あなたも少しお寬ぎになつては、いかゞです」といふた。

「あなたも少しお寬ぎになつては、いかゞです」といふた。

流石の漢學先生も、私が端然と姿を崩さんで、毎日坐つて居るので窮屈になつて困つたのぢやらう。門生や、家の者共に、

「あの方の坐つて居らるゝ行儀を見習ひなさい」と言ふたのぢや。

腹と脚は誰にも劣けんぢやつた

客「其の越後の方から、東京へお歸りになつた時の事でせうと思ひますが、何んでも芝口の宿屋に居つた私の知人の處へ、先生は旅裝を解かれたといふ話です。どうにもひどい服裝で、直ぐ日蔭町の古着屋へ行つて一着新調……いや古調をせられて、それから、すき燒を食ひに出かけられた處、先生には、途中しるこ屋を見付けて進擊、忽ち十二ケ月といふのを難なく退治せられ、之は無料凱旋といふ事になり只儲け。それからすき燒屋へ入つて又人一倍召上つたといふ。之は先生、確かに覺えがあらうから、君が上京したら先生に伺つて見よといふ事でした。」

翁「腹と脚は俺れは誰れにも劣けんぢやつた。一週間も食はんで見たり、一時に二十杯も食つたりぢや。越後から歸つた時には、半年も洗はんやうな浴衣一枚で、はだしで行くのぢやから、乞食のやうぢやつたらう。それでも東北、越後あたりでは、私を歡待して泊めて呉れ、絹の蒲團にも寢た。今日は野宿、明日は金殿玉樓ぢや。碁打ちで、先生にされて上等の料理屋へ招待され、大勢集まつたりした。

後になつて、其連中が東京へ見えた時は、私も相當酬ゐてやつた。其當時は私も天下の頭山でも何んでもない。唯だつまらん無錢旅行者ぢやつたのを、志士として歡待して呉れたのぢやから、其頃の氣風といふものは異つて居つた。人情も厚かつた。

越前へ無錢旅行

私が、越前の方へ出かけたのは二十七の年ぢや。此時は、眞藤（喜平太）と一緒で福井で、杉田（定一）の家へ泊つた。

杉田の父は仙十郎といつてこれは豪傑ぢやつた。大した身代であつたが、私と話が合ふので、定一とは碌々話もせんで仙十郎と毎日蟹を肴にして酒を飲んだ。十日餘も滯在した。年齢からいふと、杉田定一の方が私より四つ上ぢやつたし、仙十郎と私とは親といふほど違ふのが、不思議と氣が合うて、定一を除け者にして親父の方と話をしてをつた。そのころの私共の旅は、俠客共のやるやうに次ぎ次ぎと志士の間を渡つて泊り歩いたものぢやつた。

土佐で政談演説

私が二度目に土佐へ行つた時、板垣らのやつてゐる立志社では民權論を唱へ、頻りに演説會をやつて、輿論の喚起に努めてをつた。

私は福岡から同志五、六名と一緒に出かけたので、一夕その立志社の政談演説會を聽きに行つた。やがて一人の辯士が演説を終つて奥へ入ると、私は、咽喉が渴いたから、水を飲んでやらうと思つて傍聽席から、演壇へ飛上つて、コップに一杯注いで飲んだ。「上つた序に、俺も一ツ演説をしよう」とフト思ひ立つて、それから大いに意見を述べたのぢやや。

この無斷の飛入りには、滿場呆氣に取られた形で、故障をいはれて騒ぎになりはせんかと、同行の者が汗を握つてゐたことぢやが、私は平氣で、大分しやべつた。誰も故障もいはず、よく聽いたやうぢやつた。私は演説を終つてから直ぐ樂屋を覗くと板垣がゐるから「とんだ飛入りのお邪魔しました」といふと、

「いや誠に結構で」といふ板垣の挨拶ぢやつた。

これが私の演説の最初ぢや。何んとも思はん。言ひたいだけの事を言つて歸つて來たのぢや。箱田も、平岡も演説などはせん奴ぢや。草稿でも作つてやる事にしたら、その頃の玄洋社では私が一番演説がやれた事ぢやつたらう。

福岡でも演説が流行

それから、我々の福岡の方でも、演説會を盛んにやらうといふので、北川定彦を土佐から連れて歸ることにした。

歸る日に、町を（高知の城下）通ると植木盛枝に出會つた。植木は立志社では一等の演説をやる男ぢや。私は植木に福岡へ一所に行かんかといふと、宜しい、行かうといふ。「後で、社の方から不可んなどゝ言はさんことぢや」といふと、「いや社の方が何んと言はうと、私の身は私の物ぢや。私の意志

でさうと極めたことには誰からも文句はない」といふ。それで最初は、北川一人を連れて歸る豫定が植木と二人になつた。福岡に歸ると、箱田が困つた顏をして、今困つてゐる場合、二人も連れて來てどうするといふから、「金位ゐ、後からついて來るものぢや、心配せんがよか」といふて置いた。それから、福岡でも盛んに演說がはやり出した。……否や入場料は取らん。

板垣は純忠の士

板垣が何時かいうてをつた。

それは、何んでも、會津戰爭の時のことぢや。會津の勢力が縮まつて、孤城支へがたく、最早落城間近く見えた。板垣は官軍で征討に向つた方ぢや。

すると、會津の百姓か町人に、剛の者が居つて、一人で、頻りと城內へ米、味噌を運び入れる奴があつた。板垣はこれを見て感じたことに、

「全體、士族といふ特別な階級があつて殿樣直參の臣として最後まで主君のために忠誠奉公をするのは當然ぢやが、百姓の身として殿樣へかくまで忠義を盡すのは異數なことである。しかし、モ一ツ深く考へて見ると、これが異數であるやうではいかぬ。普天の下王土にあらざるはなしで、侍ばかりでなく、町人百姓までも、いはゆる四民一樣に、義勇奉公の精神がなくてはならぬ」と。

やがて明治になつて、廢藩になると、四民平等といふ事になつた。そこで、板垣は、この考へから して、自由民權を唱へて、萬民一樣に君國に忠節を勵まなくてはならんといふ思想を鼓吹したのぢや。板垣の自由民權は、藩閥政府に容れられないからといふ不平から、逆に宣傳をしてやつたのではなく、全く自分の理想から發した事ぢやらう。板垣は正直で純な人間ぢやつた。

座客「板垣が、大阪で演說をした時、先生は「板垣今一言！」といつたら、板垣が顫へ上つて默つたと聞きますが」（板垣の自由民權論が、過激になつて、皇室のことに觸れたのであらう）

翁「そんな板垣が演說をやつたことがあつたやうぢやら。竹內正志にその後板垣が（鬼を見るやうな恐ろしい男がゐるから會つて見よ）と私のことを言ふたさうぢや」

福陵新聞時代

明治十八年に、福陵新聞を造る時、一萬圓もあつたら、新聞が出來るといつたら、世間の奴共が、「頭山が新聞を出せるなら、日が西から出よう」といふから、

「そんな事で、日が西から出る位なら、やつて見せよう」といつて、最初二三千の金で始めたのぢや。

それがとう〳〵一萬圓も寄附や何かで集まつた。

仕事の出來るといふのは妙なもので、世田ケ谷の國士館も、最初五千圓ばかり金を出した者があつて出來たのぢや。

「金は出來るが、一體その仕事が出來ますか」といふから、

「仕事は出來る」と、私はいつてやつたのぢや。仕事といふものは、然ういふ風にして出來るのぢや。

此の福陵新聞時代、私は自分の新聞を讀むでもなく、社員共の顏を見るでもない。それで下の社員共は、是非一度私に顏を見せてくれといふのぢやが。

「いや、貴樣達はそんな事を氣にせんでよい、無用な事ぢや」と、私はいうて置いた。その前から、福岡新聞といふのがあつて、相當讀まれてゐたといふ。これは明治十年前から在つたのぢやが、私の方の福陵新聞は、忽ち、それよりも三四百も餘計賣れた。最初銀行から一時借をした金で始めたのぢやが、後で寄附などで樂になつた。

福陵新聞の後身は、今の九州日報ぢや。最初この新聞を作る時、主筆には、餘ほどよい者を持つて來にやならんといふ事で、犬養と久松義典へ當りを付けたのぢやが、兩人共來ぬ。

玄洋社の青年訓練

薩、長、土、肥許りが幅を利かして、皆な先輩があつて、顯要の地位を占め、後進青年を引立てゝゐる。それを見て私共の福岡の方でも、「何かさういふ引立てゝ呉れる人間があればよい」といふやうなことを、仲間の奴らがいふものだから、私は言つてやつた。

「引立てる者がないから淋しいなどゝは意氣地のない事ぢや。私はそんな頭を抑へるやうな者がないほどよいと思つてゐる。かうして目の前にお互ひゐるぢやないか。さうと氣が付いたら、自分の力で立つて行くがよい。薩長を羨むに當らん。また彼奴等を憎らしいなどゝそねむやうなケチな根性を出してはいかぬ。自分の力で立つて行くほど確かなこと、強いことはないのぢや」と。それから自分どもが先きに立つて、玄洋社を造つたのぢや。

玄洋社の青年訓練は道義を第一としたもので、最も嚴格にやつた。來島（恒喜）や月成（光）などはそこの塾生ぢや。先生も賴んで來る、我々も折り〳〵何か講話をした。やかましい議論でもして攫み合ひしたり、何か意地立てから撲り合ひをする位の事は常住ぢやつたが、卑怯なことや弱い者苛めなどは決してしなかつた。義を見て成さざるは勇なきなりで、何か身命を賭してやるやうな事でも起

ると、皆な爭うてこれに赴くといふ風で、それを最大の名譽、且つ喜びとしたものぢや……さうぢや。大隈をやつつける時にも、來島と月成とが互ひに競ひ合つて、その役目を自分が成らうと勇んだものぢや。死を見る事歸するが如しといふ風ぢやつた。

河豚は食はさぬ

「河豚を食ふやうな奴は天下國家を論ずる資格がないのぢや。無茶なことはつゝしまんけりやいかん」といつて、私は玄洋社の者に河豚は食はせなかつた。勿論私も食はんのぢや。得てやられる。

そこで、俺が福岡にゐる間は、箱田でも誰でも一切河豚は食はせなかつたのぢや。處が、俺がゐなくなると、又皆な食ひ始めた。

薪買はんか

玄洋社の維持には金がかゝる。そこで松を伐つて薪を賣ることにした。すると侍たるものが、そんな賤業をやつていかんなどゝいふ者がある。私は、賤業で宜しい。不正な金を持つて來たり、他から無理な借金などするより、立派な生業なら宜しいと言ふことにして、町へ薪を賣りに出た。他の者共は、觸れ賣りの聲が出ない。私は、最初から「薪買はんか」と大きな聲で呼んで歩いた。一所に行つた大內といふやつが「それしきのこと何んか！」と言うて出かけたのぢやが、よう聲を出さんで、終日唖の旅行ぢやつた。

私は、そんなことは何んともなかつた。道で糞を垂れて仲間のやつ共に拭かせたものぢやつた。

來島が大野仁平を撲る

柴四郎が、福岡へ來た時、常盤館で歡迎會といふやうなことをやつたのぢや。すると、大野仁平といふのが、——之は俠客共ぢや、子分を連れて來て常盤館へ登樓して我々玄洋社の仲間の室へ亂入して來た。仁平の奴が、元氣者で、酒樽を提げて此方の宴會の席へ邪魔をしたのぢや。それを來島が、燭臺で頭を叩き割つた。血が流れるといふ騒ぎぢやぢや。すると仁平の子分共は大勢で入つて來る。私が說き聞かせて彼奴等も納まつた。後には彼等も玄洋社と仲が好くなつて、大變役に立つたことぢや。

素裸で押入住ひ

市ケ谷左內坂で、素裸で、押入れの中へもぐつて居た頃の話か。あれは血氣盛りの二十六七の頃ぢ

や。東京へ出て來て五六人の仲間と一戸を借りて居つた。傘も下駄も揃つて居るのは初めの中で、やがて何にもなくなる。蒲團もなくなる。併し裸生活は俺れ位のもので、他の連中は裸では通せんであつた。

辨當を取つて食ふ。金は拂はん。そこで辨當屋の女が催促に來る。俺れは、素裸で押入れの中から出るものぢやから、女中、あツと魂消げ、退却ぢや。二三日は、俺れは食はんでも何んともなかつたのぢや。

會心の友荒尾精

荒尾は、最初私が福岡におるところへ彼方から訪ねて來たのぢや。明治十九年の春ごろぢや。溫順な、正直な男であつたから、何も六かしい議論もなかつた。私よりは四五歳年下ぢやつた。一見故舊の如く、肝膽相照らす仲となつた。

私が、荒尾君に幾らか金を融通したのは、折角彼れの志を遂げさせたいばかりの事であつた。……私が四五萬も、家を疊んで金を準備してあつたのを荒尾にやつたといふのか、それは何にももくろみがあつたことでもないし、それほどの金でもなかつた。

支那に對して、眞の眞味で、落着く處へ落着くやうな經營畫策をしたのは、荒尾を措いてないのである。

「天壽を假さず」で、臺灣で黑死病で斃れた、眞に殘念なことぢや。荒尾は、惠比壽顏で福々しく、千百歳に一人出づる英雄の相を備へたといはれた。自ら任ずる處も大なるものがあつたのぢや。

聞多でも〇多でも

その後荒尾が、支那で着々と事業をやりをつたが、三千圓ばかりの金が至急に入用ぢやというて、私の東京の宿所へやつて來た。私にも金の心配ばかりは面倒ぢや。何んとかならんものかと考へ居る處へ、或る高利貸がこれに應ずるといふ。しかし、誰か連帶の印を捺してくれなくてはいかんとの事で鳥尾にそれを賴む事にした。

鳥尾は熱海に居つたので、我々が出かけたが、鳥尾と途で會ふた。依つて茶屋の二階でその話をすると、鳥尾は自分も金は持たぬが、私の手で一つ金策しても宜しい。「就いては金の出處は何處でもよいか、實は井上馨から借り出すのぢや」といふ。私はそんなことは一向搆はんので「聞多でも〇多でもよろしい、金は天下の廻り物ぢや」というて、そのことを荒尾に告げると、荒尾は、井上ばかりは

御免だ、何卒斷つて呉れといふ。當時、荒尾は川上操六と懇意にしてをつたので、川上と井上とは關係が良くない處から、どうしても嫌ぢやと斷つたもので、その純潔な處は我輩のだゞくさとは異なるのぢや。

荒尾內閣を見たかつた

座客「私共が支那で荒尾先生の塾に居つた時、大石正巳さんがまゐりまして、町で演說をしました。私共がそれを聽きに行つて門限に遲れて歸りましたや、支那の內情が解るものか、門限を過ごしてまで聽く要はないのだといつて叱られました。荒尾さんは、よく先生の事を申して、「稀なる人物で智仁勇を備へた偉人である。世間では、たゞ大膽な勇者と見てゐるやうだが、大した智者なのだといつて居りました」

翁これを聞いて眉一つ動さず、默してしばし語なく、徐ろに口を開かれ、

「荒尾は、實に立派な人物であつた。根津がその後を繼いだのぢや。惜いことをした。三十八歲で死んだ。何から何まで能く屆いたものぢや。心事の潔白は類のないものであつた、長命だつたら立派な內閣を造れたらう……然うぢや、總理に外務、內務と自分で兼ねてやられたらう。やらせたかつた」

偉人は五百年に一度降る

私は大いに荒尾に戀れて居つた。

天は五百年に一度偉人を此世に下して、人類を救濟するといふからには、此の最も偉人を必要とする時に於て、荒尾こそはまさに其人であらうと思ふたのぢや。實際荒尾は、然うと信じて、自ら任じて、其事を口にして居つた。此の言葉も最初荒尾の口から出たのぢや。私も然う信じて、彼れを敬慕して居つた。

荒尾の一言一行は凡て其至誠より發し、天下の安危を一に己れの身にかゝると自任し、日夜孜々として其心身を勞して意としなかつた。多大の艱苦を嘗めて益々其志を勵まし、毫も一身一家を顧みなかつた。唯だ全力を盡して東方經營の大業に貢獻した。其の獻身的精神に對しては、敬服の外ないのである。世上、區々たる小得失に囚はるゝ輩とは全く選を異にし、眞に偉人の器を具へ、大西郷以後の大人傑であつた。其の容貌、識見、德望、何れの點から見ても、彼れは偉人たるの風格を示し、凜乎たる威風の裡に、一種いふべからざる、柔和にして能く人を安んじ、人を魅する力を持つて居つた。

此人ならば、必ず能く東亞の大計を定め、其抱負を世界に布き、以て後世を益するの鴻業を成し遂げ得るものと、私は信じて居つた。然るに、此の超凡絶群の偉人、中道にして斃れんとは、實に思ひ設けぬ事であつた。荒尾が死んだ時、根津一は私に手書を送つて、

「此時に於て此の英傑を奪ひ去るとは、天は何の意ぞ！」と非常に痛恨の意を洩らしたのである。

私とても、畢生の恨事として眞に同情に堪へなかつた。私は眞から荒尾を信じ、且 敬慕して居つた丈けに、其死に對する悲みも深かつたのぢや。

中江兆民は不愛想者

中江（兆民）とは、大阪で最初會ふた。大阪でその時、在野名士懇親會といふのが催された。私は、その會へ出かけて、上席へ無頓着に坐つてゐた。行儀も何にもあるものでない。袴も着けず、あぐらを組んだり、酒が來るのを待つ間、私は片膝突いて横になつて都々逸を謡つてゐた。

すると、三番目あたりの席にゐたのは中江ぢやつた。中江は、私の前へ來て、

「頭山さんの都々逸は面白い、私はこゝへかたる」といつて、その晩は私の前へ坐つてゐた。別に、彼れこれと口數利くでもないが、お互ひに、顔を見てゐるだけでよろしいのぢや。中江はその時、

「頭山さんの處へビールでも貰ひに行きませう」といつてゐたが、翌朝、私の宿へ來て、ビールを半グース飲んで歸つた。三日續けて來て飲んだ。

そこへ、竹内正志がやつて來た。竹内は辯舌の男で、如才なく物をいふ。

中江に向つて、竹内は、

「近ごろ御無沙汰をしてゐました。近日お伺ひ致します」といふと、

中江の奴、「づうとかう竹内の面を見居つたが、

「貴様に用はない。來んでもよい」と、膠もない言ひぐさだつた。三浦（觀樹）にも似てゐた奴ぢや。

「伊藤山縣駄目」

中江の奴、とう〳〵一年有半といふ本を書いて死んだのぢやが、死期を宣告されてから、漢書など讀み返して文才に鍛へをかけてあんなものを書くところは、えらい奴ぢや。死ぬる二日ばかり前中江は口が利けんのぢや、私に會ひたいというてゐるといふから、私は見舞ふた。

中江は喜ばしさうに、私の手をかう堅く握つてぢつと顏を見てをつた。それから石板を持たせて、

「伊藤山縣駄目、後頼む」と書いた。

私は承知々々〳〵をすると、につこり笑うてをつた。中江は拳をかうやつて見せて、石板へ今度は、「また立つ」と書いた……うん、死ぬる二日前ぢや、體力も強かつたのぢや。

後藤象二郎の太肚

後藤象二郎は、それほど大きいといふほどでもないが、中肉でそれでも一寸相撲取り位もあつたらう。なか〳〵えらい奴で、大きいことをする……然うぢや、大風呂敷は大風呂敷ぢやつたが、そんな法螺ばかりではない、仕事はやる方ぢやつた。

「今日天下に人がない」といふやうなことを後藤が頻りといふから、私は、

「人がなければ、あなたが自ら任じてその人になつたら好いでせう。一つ樹木を抜き、石を飛ばすやうなことを共にやらうぢやありませんか。それには金も入用であるし、私も有つてゐる福岡の炭山を賣つたら百萬圓位にはなりませうから、あなたが、一つ私の片棒をかつぎなさい」といふと、後藤は喜んで、百萬圓出來たら私に二十萬圓だけ貸して下さいといつてゐた。

それで、何處へその炭山を賣付けやうかといふ段になつて、後藤の娘の婿の、岩崎彌之助に說き付ける、それから福澤諭吉から岩崎久彌を說かせるで、三菱へ買はせることにしたが、出來なかつた。岩崎彌太郎へ最初から打つかつたら出來たであらうが。

條件付きの金は借りぬ

或時、柴四郎、佐々友房、前田案山子、遠藤秀景、それに私と五、六人で、後藤象二郎から一萬圓借りる話が出來た。皆んな金に困つてゐるのだから、後藤が貸すと聞いて喜んだ。そのころの一萬圓は一寸役に立つ。そこで、連名で、借用證を書いた。書き終へて、いよ〳〵金を受取る段になつて、後藤の子分の何とかいふのが、金を持つて來たが、貸すについて何か條件のやうなものが付く。自分勝手に遣ふ譯に行かんといつたやうなことぢやつた。それで、私は面白くなくなつた。その證書を引裂いて、

「僕は折角だが、一萬、二萬の金を借りて、遣ひ途に注文を付けられるのは嫌ひぢや。諸君はまた別に證書を書いて借りるがよい。私はこの連名の證書にはかたらんことにする」といふと、やがて佐々は私に同意して借りることを止したやうぢやつた。

後藤象二郎から手を入れて、岩崎へ、私の炭坑を百萬圓で賣り付ける話のあつた少し前の事ぢや。何か氣に食はん事があつて、私は後藤へ絶交狀をやつて居つた。處が、後藤が工面の好い事があつて、三千圓ばかり金を貸しそうな模樣ぢやから、新潟の山際七司を使者に立てた。山際は風邪を引いて臥せつて居つた。元氣者が寢て居る位ぢやから、熱もひどかつたのぢやらうが、其頃の俺れは病氣でもなんでも勝ち拔く元氣ぢや。足を出して蒲團にくるまつて居れア風邪など直き癒るのぢやから、山際が寢て居るのを起して後藤の處へ出かけた。それが惡かつたと見えて、山際は死んだ。氣の毒な事ぢやつた。

今度は、代つて剛の者、遠藤秀景が、使者に立つた。隔日に後藤の處へ出かけて三千圓の催促ぢや。遠藤は、北陸の鬼と言はれたもので、柴田勝家と言つた處ぢや。死士の三四十人も有つて居やうといふしたゝか者で、俺れの好い相棒ぢやつた。それが一日置き出かけて後藤を攻めるのぢやから、堪らんだらう。其頃の三千圓といふと、當今では十倍餘にも當るので、一寸凌ぎが付くのぢや。

その中、正月になつて、俺れは遠藤と同行、後藤を訪ねた。長椅子に坐つて閑談をした。後藤は、

天下人なしといふから、俺れは、

「人なきを嘆ずる事はない。君自ら其人となれ。そして大風を起し、大石を飛ばそう、君は私の片棒を擔げ」といふと、後藤は喜んで、

「それは大いに愉快ぢや」と言つて引受ける。

それから、閑談時を移す間に、前に言つた俺れの百萬圓の炭坑の話が出て岩崎へ賣り付ける算段になつたのぢや。それが出來たら大いに面白い事が出來る筈ぢやつた。

今の一千萬圓もあれア一ト仕事が出來やう。

「朝鮮と內地に亙つて大いにやりませう」と後藤も乘り氣になつた。

金玉均もまだ生きて居た時で、本當に俺れが一生の仕事をしやうと考へたのぢやが、褌と何やらで、百萬圓は外れたのぢや。

後、三浦（觀樹）に其事を語ると、

「天は、君の爲を思へて、其の金を出來さなかつたのぢやらう」と言ふた。

條約改正騷ぎ前後

明治二十二年、大隈の條約改正騷ぎの時、いろ〳〵會合が開かれたもので、その席上、始めて、三浦（觀樹）鳥尾、杉浦などに會ふた。谷（干城）とはその前から土佐で會うてゐる。私は「條約改正などいふことは、何にも大隈一人でやるべきことぢやから、己れは、斷じてやらせぬと極めて置けば、何にもいふことはない」といつて置いた。

この條約改正騷ぎの時、私は佐々（友房）と兩人で、松方を訪問したことはあるが、伊藤を訪問はしない。伊藤と會ふたのは、その後日清戰爭の時ぢや。

大隈の條約改正は、前の井上の改正案よりも、一層頑強に主張するので、在野の志士連は躍起となつて反對する。それで、牛込の東五軒町に集會所を設けたのぢや。浪人者の豪傑揃ひで、忽ち梁山泊が出來上つた。そこでは、谷（干城）と鳥尾が大いに議論をやつたものぢや。谷は鳥尾に向つて、

「貴樣は昨日いふたことゝ、今日いふことゝ異ふ、怪しからん」と怒る。

鳥尾は鳥尾で、

「昨日は昨日でよい。今日は モ些つとよい考へが浮かぶ。日に新たなりぢや、貴樣は愚劣でいかん」

こんなことで、この二人は盛んに議論をやつたものぢや。

何に？……福富の話か、……あれは臨淵といふ號を付けてゐた。六尺もある赧い顏の大男で、正直な、一刻者で、酒を飲むと、手が付けられん。議論が面倒臭いといふので直ぐ取組み合ひ、撲り合ひだ。皆手に餘してゐたやうぢやが、私に留てくれといふ、私が宥めると、止めた。

小身の豪傑小村壽太郎

同じ條約改正騷ぎの時の豪傑に小村壽太郎がをつた。小村が、外務大臣になつて大いに腕を揮ふたのはモつと後のことぢやが、この時から名を知られてをつた。

私は、小村とは一度も顏を合はさんが、杉浦（重剛）と小村とは能う知り合つてをつたので、何時も、杉浦から話を聞いて、私も小村と會ふたと同樣に知りをつた。

小村が死ぬる二、三日前に、杉浦が私の家へ見えて、

「今、小村を見舞つての歸りで、小村は、私はモウ駄目だから、山座を代りにといつてゐました」と語つた。

山座は、玄洋社の前身の、向陽塾に一時居つたもので、小村に、代りとして推薦される位ぢやから

相當やれたはずぢや、早死で惜いことであつた。

小村は伊藤を出し抜いて日英同盟をやつた位で、外務大臣でゐて内閣を一人で背負つて立つ氣組みであつたやうぢや。……然うか、陸奥は、議會では、えらい權幕であつたが、伊藤の前では、小いさくなつてゐたといふか。小村は異つたやうぢや。

小村の六升酒

小村は、一日六升の酒を飲んだといふことぢやが、目方は九貫目しかなかつたといふのぢや、不思議な體ぢや。私も三十ぐらゐまでは五合の酒は飲んだが、その後は止めた。續けて飲んだら、一升そこらは飲めたのぢやらう。

「酒を飲まんで、豪傑が出來んくらゐなら、豪傑を止めたがよい」と考へて、私は酒を止めたのぢや。

小男の小村、暴魯を挫く

小村は九貫目の身に、日本全國の運命を背負つて立つたのぢや。元老などを、彼の手腕で丸めたなど言ふたものぢやが、實際の仕事は小村がやつて居たといふ事ぢや。然もあらう。伊藤共が、恐露病にかゝつて、日露同盟などいふ腰抜け策に腐心して居る間に、小村は殆んど獨斷で以て日英同盟を成就したのぢや。それで露の横暴を挫いたのぢや。小國に小身の豪傑が居て國威を廣大ならしめ、大男を顏色なからしむる處は痛快ぢやな。

傑僧南天棒

六升酒で思ひ出すのは南天棒ぢや。南天棒和尚が仙臺へ行つた折、松島の瑞巖寺の伊達政宗の木像を見たが、惡戲をしてその鼻を煙草の火か何にかで燒いた。仙臺藩の連中が怒つて南天棒を斬つてしまふといふ。すると南天棒は、

「之は己れがやつたことぢやなくて、貴公らが己れに飲ませた酒の罪ぢや、ま、勘辨せ」といつて逃げも隱れもせんので、そのまゝこと濟みになつたと言ふことぢや。南天棒は生來の下戸ぢやつたが、酒を飲まんと豪傑でないやうなことをいはれて、酒席ではいつも弱らされる。それから稽古して遂う遂う五升酒を飲む迄になつたといふ事ぢや。私が會ふたのは、モウ七十近い頃でもあつたらう。

鹿鳴館の馬鹿踊り連を糞溜へ

客「鹿鳴館の舞踏騒ぎの時、在野の志士の方では何か異論が無かつたものでせうか？」

翁「有つたどこぢやない、伊藤、井上共を生かして置いては日本人を外人の奴隷にするやうな事になるから、殺して了へといふのぢや。斬つたのでは、日本刀の穢れになるから、之は糞溜めを大きく造つて、皆んな埋めてやるが宜しいと言ふたっ

それで、伊藤を訪問する時には、寝巻の儘で澤山ぢや、袴を着けるなどは、いかぬと言ふた。此頃の大臣なら裸でよからう。英米を、日本開國の大恩人であるなどゝいふのは、誤りぢや。七割問題など何事ぢや、彼等を恩人らしくいふのは、腰抜け根性ぢや、伊藤、井上を排斥したのは、其の意味ぢや。

伊藤の智は横へ廻つた

伊藤は、書記か秘書官ぢや。井上は商人ぢや。井上は秋田邊の鑛山事件かで、司法卿の江藤新平に縛られるところであつたのを、跣足で遁げたとかいふのぢや。江藤が、あんな慘酷な卽決裁判で死刑などになつたのも、大久保の部下たる伊藤、井上に恨まれて居たからぢやらう。

伊藤は、智も相當あるには有るが、横の方へ廻る。自分が失敗して總理の地位を去る際には、別の地位を造つて、矢張り權威を握る事を考へたもので、樞密院議長になつたり、又は西園寺に後を譲つて、自分は背後から糸を引くのぢや。西園寺は、明治天皇陛下の御學友であつたといふ點、又公卿出身の門地がある點などで、伊藤にしては、身代りをさせるに都合がよかつたのぢやらう。西園寺も、數度總理にはなつたが、別段の仕事もしなかつたやうぢや。私は會ふ要もない事で、顔を合せて話をした事もない。

何んでもやるぞ

何時か、東京で薩摩の樺山が酒を飲んでから、づか〳〵と私の處へ來て、膝の上へ腰かけたのぢや。わざと醉狂を粧うて私に挑むのぢや。

私は、膝を崩さず、

「貴樣何を欲しいか。何んでもやるぞ！」と叱り付けたら、彼奴こそ〳〵退つて行つた。

陸實は硬直

陸（實）とは、大隈の條約改正騒ぎの時、牛込の東五軒町の志士集會所で初對面であつた。硬直な男で、杉浦なども陸とは能く知り合つてゐたのぢや。何時か皆んなで碁を打つてをつたが、陸は、何時も、つぎ落しなどでやられてゐるので、其時もそんな手ばかりやる。皆んなが、陸に、君は碁は止せと言はれたものぢや、……うん　天下取りの野心を碁盤の上でばかりは存分やつて見やうといふ肚か？……ま、そんな事ぢやつたらう。負けず嫌ひぢやつた。その點では三浦、犬養、陸、皆な同じぢやらう。大石（正巳）は稍や異ふ。

三浦の碁は腕力で行く

何時か、上野の鶯谷で、三浦が大石と碁を打つて、負ける。勝てんもんぢやから、口惜しがつて、翌日まで止めぬ。大石は勝つてゐるので、意地も立たん。眠くつて堪らんと見えて、石を握りながら、居眠りする。三浦はそれへ馬乗りになつて押へ付けて、

「まだ負けんか〳〵」といつてゐた。

然うか、熱海で、古屋旅館の內田と打つて三浦は負けたか。……うん四番負けて、石を盤面に叩き付けたか、……それで石が庭へ轉がり落ちたのを自身下りて行つて拾つて來た……そこは流石に三浦ぢや……翌日、內田が行つたら、昨日失敬したと謝罪まつたのか、……うん、そこがえらい處ぢや、そんな氣象の男ぢやつた。

風鈴均一碁で三浦の大敗

或る年の正月に、五六人寄つて、犬養、古島など似寄つた手合で、正目風鈴均一碁といふのをやらうといふ話が出來た。喜多文子を招んでやるのぢや。

其處へ三浦（觀樹）がひよつこりやつて來た。

「よい處へ來た。風鈴均一でやるのぢや、お前も一つ仲間になれ」といふと、三浦は考へて居つたが

「俺れは嫌やだ」といふのぢや。

「嫌やといふ事があるものか、我々も皆な風鈴でやるのぢや。千載の好機ぢや、是非やれ」と、無理無理坐らせて了つた。

そこで、喜多とやつたが、三浦は忽ち中を皆な取られた。

「なに、風鈴さへ取られなければよいのぢや」と三浦が滅らず口をたゝき居る中に、風鈴も取られて了つた。

鳥尾訪問の失敗

鳥尾（小彌太）は青く、しやべる、撲るの三拍子揃つたやつで、伊藤、井上などが、刎ね返される。機鋒の鋭い奴で、伊藤などより十歳も若いが、却つて彼等を見下してをつたやうぢや。杉山（茂丸）が鳥尾を知つてゐるから、私も一度會つて見やうと思うて、杉山に案内をさせた。その以前、大隈の條約改正騒ぎの時、東五軒町の集會で、鳥尾に會つてはゐるのぢやが、大勢ごちやごちやの中であるし、私はその會合へは一度しか出なかつたので、鳥尾と名乘り合ひをしたでもなかつた。それで、此時初めて親しく會つて口を利くことになつたのぢや。

前以て日を定めて、私が出かけた。鳥尾はその時、音羽の邸にゐたのぢや。行つて見ると、鳥尾はをらん。約束をして置いて怪しからんと思ふて歸ると、鳥尾の方でも、

「私は、貴族院へ出席するのを見合せて、待つてゐたに、頭山が來ん」といふのぢやさうぢや。

そこで、また日を定めて、私が出かけて行くと、また鳥尾は居らんといふ。そして、鳥尾の方でも

「あんなに約束をして頭山が來んではないか、用を差置いて待つてゐたに」といふ。

どうも變だと思うて、聞いて見ると、漸う解つた。それは團々珍聞とかいふのをやつてゐる、何んとかいふ男の家と、門構へが能う似てをるので、私はそこへ二度とも行つたのぢや。

「鳥尾君はゐるかな」とやれアよいのぢやが、私も、約束はしてあるしするから「お在宅かな」とやつたものぢや。「主人只今不在で御座います」と來る。それで、三度目にはじめて家を間違へずに會つたのぢや。

鳥尾、井上を罵る

鳥尾は井上の人種改良論といふやつをひどく嫌つて、井上を攫まへて散々油を取つた話がある。

「お前が、そんなに人種改良を唱へるなら、よろしい。明日から日本の女と寢る事はならんぞ、西洋の女とばかり一緒にをれ。そして日本の女は、お前の娘共も、みんな西洋人とばかり交際させる事ぢや。もし、お前が西洋の女と一緒になる事が嫌といつたら、日本女と一緒になる事はならん。△△一方ぢや。それでよろしいか」と鳥尾がやつたものだ。

「いやそれは迷惑な事ぢや」と井上がいふと、「それ見ろ。自分に出來なからう。自分に出來ないことを

を人に強ひて、人種改良もあるか」と鳥尾に散々やつつけられて、グウの音も出なかつたといふのぢや。

鳥尾でも、三浦でも、伊藤、井上などはてんから駄目ぢやといつて見くびつてをつた。たゞ品川ばかりは、鳥尾や、三浦とも氣が合ふし、一方伊藤、井上とも友達になつてをつたのぢやら。

鳥尾に始めて會ふた時であつた。私も禪をやると思つたのぢやらう。

「頭山さんは禪學の方は大分おやりですか」といふから、私は、

「いや、私は無學の方で」と答へた。

來島（恒喜）が、大隈をやつた時には、私は、廣島の條約改正反對會合へ臨んでその歸途を大阪に立寄つてゐた。そこへ警察から私を呼びに來た。警察では、「來島恒喜といふ者を知つてゐるか」といふから、「知つとる處ぢやない、自分の弟のやうな奴ぢや」と答へてやつた。

「それでは、大隈をやつたことを知つてゐるだらう」といふから、「來島といふ人間はよう知つとるが、大隈をやつ付けたことは何にも知らん」というてやつた。私はそれで、朝から晩まで警察へ留められたがその日の中に歸された。他の者共は一ケ月だの、十日のと、長い間牢に入れられたが、私ばかりは、一日で濟んだのぢや。

犬養とは條約改正の翌年始めて會ふた。犬養が私の處へやつて來て、私に一ツ纏めてくれといふのぢや。つまり板垣の方の自由黨と、大隈の方の改進黨と一緒にしてくれといふのぢや。これは、民間黨を合同して、藩閥政府に當らうといふので、後の板隈內閣の下地ぢやつたらう。私は、

「叩きこはす事は出來るが、まとめる事は駄目ぢや」といふと、犬養は、しばらく一言も發せずにその儘歸つて了つた。

「お前は許さん」と井上へ

私が、豐前の炭坑區を願ひ出た時であつた。丁度、藤田傳三郎からも同じ願ひがあつた、といふのぢや。それが、場所も同じ處で、坪數迄同じなのぢや。

之は些とおかしな事と思うて居ると、其時福岡の知事をして居た——誰れやらいふたな、あれは。……其の知事が聞いたといふので、……此處へは名が出ん方がよからう。隱すより現はるゝはなし、天に口なし、人をして言はしむるで、柴四郎が來て、其の知事から聞いたといふ話をしたのぢや。

それは、大藏卿の井上（馨）から知事へ內命があつて、其の炭田は、藤田傳三郎へ許可せよ」といふ。そして藤田の方が願ひ出でが後になつて居るのに、井上が、藤田の方が正しいと言ふて來たとの

事ぢや。

此話を聞いたから、私は、

「ようし、之はメめたもの」と思ふた。

それから、うんと叱り付けた手紙を、井上へやつて、

「時と日を定めて會ふから返答せよ、三日間の猶豫をする」と言つてやつた。

「どつちが正しいか、會つて話したら分るのぢや。後のものを先きにして、怪しからん事をする。他の者なら許すが、お前は許さぬ」と書いてやつたのぢや。随分強く言つたものぢや。

井上は、餘程驚いたと見えて、和田維四郎を介して、

「私は知らん事である。藤田とは從來知つて居る間で、何やかや面倒見てやつた事もあるが、其の炭坑の事は能く知らなかつた。藤田が泣き付いて來たので、何心なく許すようにと言つたのぢや。是は内からやらせん事にするから、君は藤田の兄の鹿十郎を呼んで、傳三郎へ然うと因果を含めるやうに」

斯ういふ意味の事を和田にふくめて、同郷の三浦（靱樹）に頼んで、私へ取りなす事にしたのぢや。

そこで、三浦は、私の處へ來て、

一面白い事があるよ、井上から斯ういふ話があるのぢや」と、和田の今の話を傳へたのぢや。

愈よメめたものと見て、私の方では、鹿十郎を呼んで、傳三郎の方へ話を付け、願書を引込めさせた。遂々、井上は私に加勢して、私の出願は許可になつた。

井上と、藤田傳三郎とは、そんな關係があつたもので、尾去澤銅山事件といふのもあつた。江藤新平が司法卿で、裁判するといきまいたのぢや。井上にはそんなやうな事が幾つもあつたやうぢや。

大晦日に廻る金

何時か、大晦日に、遠藤秀景が來て、

「千五百圓ばかりないと腹を切らんければならん」といふ。

眞劍な奴で、本當に腹を切りかねない奴ぢやつた。私の手元には千圓だけ有つた。それを遠藤にやつた。

すると、私の賄をしをる梶川が二階へ上つて來て、この話を聞いて、頻りとこぼす。

「押詰まつた今日といふに、それでは支拂ひが出來ない。どうにもならん」といふのぢや。

しかし、腹を切るといふに、それでは支拂ひが出來ない。どうにもならん」といふのぢや。

しかし、腹を切るといふものを、現在持つてゐる金をやらんといふ譯には行かんのぢやが、梶川に

しては、さう單純には承知してくれんっ「ま、仕方がない、金は天下の廻り物ぢや。こんな時は、鼻唄でも歌つてゐる事ぢや」といふと、梶川は、そんな歌なんか謠つてゐられる處ぢやありませんがなと、ぶづ〳〵いふ。

「こんな時、唄も謠へんやうな事でどうするか、下へ行つて寢てをれ」と叱り付けた。

その午後、赤羽四郎が來て、話をして、歸つた。梶川が上つて來て見ると、座に包物がある。

「赤羽さんの忘れ物でせう」といふから、「いや、默つて置いて行つたのぢやが、歸る時、わざと差出して行つたからには、忘れ物でもあるまい。ま、開けて見ろ」と私がいふ。開けて見ると、千圓入つてゐる。

「それ見ろ、モウ廻つて來たではないか」

これで、年がどうにか越せることになつた。

濱の家無錢寄留

私はその日の夕方、ぶらりと家を出て、濱の家へ遊びに行つたのぢや。

「何に？……濱の家へはその時が始めてぢや。……然うぢや、そのまゝ居續けて、暮れも正月も一緒ぢや。それが、私の年中正月ぢや。……然うぢや、それから二年ばかり濱の家無錢寄留ぢや。

濱の家の嬶は、待合の寄合ひなどへ行つて歸つて來て、「今日はおかげで威張つて來ました」といふから、何んのことかと思ふと、そんな寄合の席では、能く懸けが取れない話が出るので、私が、一年あまりも濱の家に寢轉んでゐて、一文も拂はんからその懸けが大きい。それで女將共がその話になると、お濱は、俺のことを引合に出して「その點なら、妾の家は、何處にも劣けません」と威張つたといふことぢや。

副島の色男氣取り

濱の家のお濱は美人ぢやつた。大木（喬任）が惚れて、その時の金で二百圓を持つて來た。お濱は、知らん顏してその金は取つたが、情は許さん。

お濱は却つて副島（種臣）に許した。着物から何から一式仕立てゝやつてとんと情夫扱ひぢや。副島は中肉ぢやつたが、腹は出てゐた。それから、副島は私に會つた時、「私も藝者買ひを致します」と、色男氣取りでをつたやうぢや。

佐々の「禿げ」

この濱の家時代に、能く佐々（友房）が遊びに來たのぢや。佐々とは、福岡にゐる時から知つてゐた。

佐々は二十歳位の時から頭が禿げてをつた。それで、先生といはれた「さつさ先生」で通つたものぢや。神童ぢやつたらう。私共は、佐々の禿げといつてをつた。すると其の後私の頭に一ケ所、禿げが出來て困つた。見つともないから、くり〳〵坊主にそつて了つた。佐々は、それを見て、

「私の事を禿げといふから、罰が當つたのぢや」といつて、卻つて今度は、私は「禿げ」にされた。

佐々は、私に向つて、

「君は、獅子の口へ手を突つ込むやうな事をやるが、私には出來ん」

と能くいふた。

佐々が死んで二十年、法事をした事がある。その席上佐々の門下生といつた人達が大勢をつて、私に、

「先生から私の方の先生へのお手紙は、悉く拜見致しました。隨分猛烈な文言で多く金を借りる用向きのやうですが、金を借りるのだか、取るのだか解らんです」といふ。

「三百圓渡せ」などいふ文面ぢやから、借りるのか取るのかわからんはずぢや。

佐々は「金と女は君の眞似は出來ぬ」

といつてゐた。

未た品川（彌二郎）に會はん前の事で、佐々は、自分が一緒に行くから一度品川に會へといふ。よしといふので、一緒に行つて初對面をした。歸りがけに品川が、

「お宿は何處です」と聞くから、私は、

「愛宕下の濱の家です」と答へる。

佐々は却つて赤面して、待合を宿とはひどいといふ。

「何に自分の座敷も濱の家も同じ事ぢや」と答へてやつた。

すると、翌朝、佐々は荒尾と兩人でやつて來て、

「君の處へは來たいのぢやが、遊びに來るにしてからが、この家では困るから、普通の家へ宿替をしてくれ」

といふ。

「それは造作ないが、三四千圓食ひ込みがあるから直ぐ引越しは出來ぬ」といふと、

「いや、その方は兩人で形付けませう」といふ。

佐々はその時三十八歳、私は三十七歳であつた。私は、

「そんならその金を此處へ持つて來てくれ」といふと、

「それは險呑だからいかん」といふので談判が破裂した。私は、

「そんな面倒な事は止めやう、君らは察しが好い」といつてやつた。勿論此方は引越す氣がないのだから、險呑は險呑な事ぢやつた。

佐々が、

「僕でも、荒尾でも、品行が正しいので、議論で交はる。君は、酒も飲まず、亂暴もせず、その點は至極宜しいが、女の方は迚も猛烈ぢや、それだけでも豪傑は豪傑ぢやが」といつてをつた。

それでも性質の異なつた者が却つて氣が合ふと見えて、能く濱の家へ訪ねて來た。杉浦も時々濱の家へ訪ねて來て歌をうたつて歸つた。藝妓の方は私が引受けた。

之が誠の道ぢやらう

そのころ、土佐の宮地茂平、千葉勘次郎が揃つて濱の家に來て、何んでも私に金を貰ひに來たのであつたらう。

「先生は何時もこの家にをらるゝが、一體何をしてゐらつしやいますか」といふから、

「俺は誠の道をやつてゐる」と答へると兩人は、怪訝な顏をして居る。

「俺は怠け者で、何事も永續きせんが、この家は面白くて何時までをつても飽かん。これが一番誠の道ぢやらう」といふと「アーン」といつて彼等は、金の相談もし切らずに歸つてしまつた。

安場の三ば

安場（和）の三ばと言はれたもので、安場の落馬のちんば（跛行）ぢや。馬が好きで乘つたのが落馬をして、跛行になつた。妙な鴨あしのやうな足どりで、歩るくのぢや。

熊本の出身で、横井小楠の高弟ぢや。嘉悦と、モ一人の內弟子と、三人並び稱せられたのぢや。年は、俺共より二十も多かつた、西鄕あたりよりは十歳、年下かな。人から年を聞かれる事が嫌ひで、

「おれは馬鹿ぢやから自分の年は知らん、馬鹿に年はないのぢや」と言うて居つた。

福岡の知事をして居る時、福岡からは議員が九人出る。其中、八人迄は俺共の方で取つたが、柳川

に一人残る。それを是非此方へ取らんければ、といふので、俺に柳川から候補に立てといふのぢや。そこで、安場が料理屋へ俺を招んで、是非にと勧める。俺は議員などにはなる氣はないのだから、てんで受け付けない。安場は、

「之れで聽かんけれア組む」といふ。熊本言葉で組むといふのは、組打ちの事ぢや。俺は、

「やらん事は、誰れが引張り出しても決してやらんのぢや」といふと、

「こげん剛情な奴もない」と、安場は呆れて「俺れが堤防の金を、東京へ行つて大臣から取るは易いが、貴様を議員にするのは骨ぢや」といふ。

「大臣などと同じものにされて堪るか」と俺れは言うて、大笑ひした事ぢや。

其後間もなく、農商務大臣かの高島鞆之助に會ふたら、

「安場の奴に、キヤン〳〵言はれると氣分が惡うなる」といふ。

堤防の金の話が思ひ合はされて、おかしかつた。高島は、黒田も恐れる剛の者であつたのぢや。

モツと下らん奴ぢやつたら、東京へ出て大臣にでもなつたらうが、安場の眼中、大臣も總理もないのぢや。伊藤總理の頭から、小便の飛沫を浴びせる豪傑ぢや。知事をして居るのも、大臣をするのも同じ事なのぢや。それで、其後北海道長官になつた。氣が向けば何んでもやるのぢや。其の北海道へ行く時、誰れかゞ、

「北海道も之からはお寒いので……」といふと、

「何に！　寒い位でへこたれる奴があるか」と、やんちやをいふのぢや。

處が、内閣が變つて、今度は伊藤（博文）がやる事になると、安場は、辭職るといふから、俺れはやめさせん。訪ねて行くと、杉山など居るから、

「俺れが話があるのぢや、貴様達はあつちへ行つて居れ」と避けさせて、それから安場に、

「あなたは、やめんで宜しい」といふと、

「伊藤の方からやめさせるだらう」といふ。

「否や、伊藤はやめさせません」というて辭表は出させぬ事にして、それから俺れは、三浦に伊藤を說かさせ、安場を其儘にして置かせた。

大隈の時代になつて、安場は遂にやめてしまつた。伊藤以上に大隈を嫌つて居つたやうぢや。

俺れを議員にする話は、方々から持ちかけられたもので、安場の後に、今度は、佐々も頻りと勧めた。俺れは、佐々に、

「貴様の議員になる事を止めないから、貴様も俺れの議員にならぬ事を止めるな」といふたら、佐々

も返答に支えた。

安場の書生をした後藤（新平）とは、早くから顔を知つて居つた。後藤は、安場の女婿となつたので、安場の感化が多大なるものがあらう。今度の復興祭では、後藤の名が第一に語らるゝのぢや、却却大きい事をやる奴ぢやつた。

「今日天下の急務は頭山が金を作る事です」

副島とは、佐々友房の案内で始めて會ふたのぢや。佐々は私に、

「副島は會つて置いてよい人です」

といふから、私もその氣になつて佐々に連れられて行つて會ふた。

その時、副島は、

「今日、天下の急務は何んでせう？」と問ふから、私は、

「頭山が金を造る事です」といふと、副島は「これは近ごろ面白い事を聞きました」と、眞實面白さうな顏をする。

私は、前にいつた、後藤象二郎から岩崎に說かせて、炭坑を百萬圓ばかりに賣る話を進めてゐた折りであつたから、そんな事をいつて見たので、まるきり、根もない事を口外した譯ではないのぢや。處が、副島も、そのころ炭坑を有つてゐて、金にしやうといふ際であつたとかいふ事で、私が金儲けの事をいひ出したのが、氣に合つたのであつたらう。

私を漢の高祖に見立てた

副島は初めて會つて大いに胸襟を披いて語つたやうな次第で、

「漢の高祖劉邦といふのはあなたのやうな人でもあつたでせう」といつてゐた。

副島の家を出て歸る途中、佐々は、當今の急務の答へが、餘つ程變なことゝ思ふたと見えて、

「あんな眞面目な男に、頭山が金を作ることですなどゝ、一體何處を押せば、そんな言葉が出るか」と呆れてをつた。

私は唯だ本當のことをいつたに過ぎんのぢや。全く炭坑を賣りつけて百萬圓も握つたら一寸面白いことが出來るはずぢやつた。

副島は腹は相當出てをつた、腹を撫て、

「私は何時も貧乏はしてをりますが、浩然の氣は斯の通りです」といつてをつた。

副島の膽伸ばし

その後、金玉均が來て「副島さんが、大變お困りの樣子ですが、何んとかなりませんか」といふ。借金で苦しんでゐるといふのぢや。正直な、眞面目な男ぢやから、方々借金がかさんで氣を腐らしてゐる樣子ぢや。

そこで、私は「私にも金は直ぐ出來んが、借金位のことはどうでもよい。一ツ行つて副島の膽伸ばしをする位造作ない。今からでも行かう」といつて、副島の家へ行つた。そして、

「國家の柱石たるあなたが、その位の事に心配するのは宜しくありません。人には能不能あり、そんな金の事などは、あなたが、心配なさらんでも、あなたの知られる人間で其方の能のあるものが何んとか致しませう。私共は、拍手一ツ打つてもそんな金位は出來ますが、そんな事は、土臺、あなたの御心配なさる問題でないのですから」といつてやつた。副島は大層喜んで、

「いや、金のお世話をして下さらんでも、その御一言は難有い。仲間になつても此の御親切に報ひます」と大いに愁眉を開いてをつた。

副島の借金といつても、私の高利貸共から借りてゐたのに比べたら問題にもならんものであつたらう。伊藤や大木などが、その借金を支拂つたといふことぢや。

岡田の女將を驚かす

あのころの待合には、滅多に我々を上げん家があつて、何んとかいつた……、岡田か？　その岡田といふのは、當時の大官といつた連中ばかり行くのぢや。伊藤、井上などが能く行くさうで、よほど金でも棄てるやうなものでなくては上げんといふから、私は、一ツ上つてやらうと思つて、玄關からいきなり二階へ上つた。

「今日は遊んで行くよ」といつて上つてしまつたものだから、下ではごだ〳〵やつてゐる樣子ぢや。女將が、そんな知らん客を上げたのが惡いといつて、上げたのでない、上つて了つたのだといふ。私は、二階へ上つてをるが、一向女共も出て來ん。私は、そのころ、濱の家の婿から習つた太閤記十段目を大聲で謠つてゐた。節も何にも出來てをらんのぢやが、そんな事は構はん、大きな聲でやるのぢや。

ところが、しばらくすると、打つて變つて大いに歡待し出した。全く下へも置かん取扱ひぢや。これは風向きが變つたぞと思つて、遠慮せずに御馳走を食ふ。妓も大勢出る。「俺を知つてゐるか」と問

ふと女将が、

「濱の家の頭様でございませう」といふ。

「能く知つてゐるな」といつてやつた。大いに遊んで濱の家へ歸つて來た。

すると二三日して、濱の家の嬶が、俺に、

「この間、岡田へ面白いお客があつたさうで御座いますね」といふ。

「誰がそんなことをいつたか」と問ふと、

「昨晩、後藤様が見えられてさう申しました。最初岡田では物騒な客だといつて、二階へ行く者もなし、困つてゐたさうでございます。そこへ後藤様がお出になつて、縞つと二階の室を覗いて見て、あれは怪しい者でない、濱の家の頭山だ、うんと御馳走してやれ、決して損の行く客でないといひましたので、それから、打つて變つてのおもてなしであつたさうでございます」といふのぢや。後藤象二郎のことぢや。私の事を能う知りをるので、私も仕合せをしたのぢや。

後藤は容堂侯に可愛がられて、藩内では勢力があつた。板垣の方は、正直で、信用があつたゝめに、外藩の志士達から買はれた事は、後藤以上であつたやうぢや。後藤は、豪膽なところがあつて、強か者ぢやつた。

年中正月常二十才

私は三十までは品行方正で、待合入りも藝者買ひもせんのぢや。ま、不良老年の方で、三十後から放蕩を始めたのぢや。何時も氣が若く、元氣で「年中正月、常二十歳」といふのぢや。

頭山とは如何なる仁か？

結城寅五郎を使者にして、佐々（友房）から二千圓借りた事がある。

處が、其處に居合はした者が、佐々に向つて、

「其の頭山とは如何なる仁か？」とたづねた。

「御尤も、あなたが私を驚く距離を一寸とすると私が頭山を驚く距離は一尺です。頭山から證文を取る位なら金を貸さん方がよろしいので」と佐々が答へた。

「ハー！」と、其男が唖然として居たと、後で佐々が笑つて話して居つた。

佐々は策士のやうに言はれたが、却々、眞面目で信用があつた。勤王の大義に根本を置いた、立派な精神があつた。

其頃、私は炭坑の拂下げ運動で、毎日百圓づゝも入用。それで佐々から二千圓都合してもらうたのぢや。證文なしで貸して呉れた。

佐々は操守あり、確然たる意志あり、偏狹ならず、道義に叶ふ處は、伊藤でも誰れにでも贊成した。決して利害の徒ではなかつた。大臣の名稱などを望んで居なかつた。

佐々は、念入りな男で、何事に當つても、上中下三段の策を立てゝかゝつたやうぢや。

お妻の髪を切つた話か？

●●お妻の髪を切つた話か？

あれは、反對ぢや。

お妻の弟が來て、

「姉は此頃不品行でいかぬ」

と云ふから、私は、お妻を妾にするつもりはないといふて、お妻が何にも私に氣兼ねはいらん。好きな男と一緒になつて居たらよからうといふやうな事を話してやつたのぢや。

すると、お妻が自身切つた髪を持つて詫びに來たのぢや。

政府の腰拔けを追分で諷ずる

私の追分けは、腰拔け政府の者を片目船頭に見立てた唄から始まつたのぢや。西洋の眞似ばかりして、日本人だか西洋人だか分からん樣な事ばかり言ふ、大學に居つたロバートといふ英國人が、教授を罷めて國に歸る時、此家へ來て言ふた事に、

「こんなにして日本といふ國はどうなりませう。日本といふ事を忘れて、何もかも西洋の通りにしては、御國は持てますまい」といふた事ぢや。

勿論、私共は、最初から、伊●藤あたりの腰の弱いのが困りものと見て居つたので、例の追分の文句を謠つたのぢや、

「船は破れ船、船頭は片目、乘つたお客は皆な沈沒」といふのぢや。

それを或る家の祝言の席で謠つて、嬶に叱られた。

客「御祝言が目出度納まつたら結構な事で、却つて逸話といふ事になりませう」

翁「處が、忽ち破鏡に終つたのぢや」

鼻かけの英雄

あれは、私が三十七八歳の頃ぢや。鼻が赤くなつた。腐つて障子が落つるかなどいふのぢや。
それを心配して呉れて、荒尾が、梅毒のひどいやつになつたものと思つたらう。
「古今の英雄を調べて見ましたが」と尤もらしい口調でいふのぢや。
「鼻かけの英雄といふのがないやうで御ざいます」と、忠告ぢや。
私は、一向無頓着ぢやから、
「そんなら、私は英雄の範圍を廣めてやらう」といふと、
「そんなのは廣めぬ方が宜しいので」と荒尾は恐縮ぢや。
副島（種臣伯）迄が其の話を聞いて心配して見舞つて呉れる。
「あなたが、そんな事になつては、困ります」と御挨拶ぢや。
それでも、其頃の新聞にも、そんな私の噂が出なかつた。新聞は、私の事は滅多に書かんのであつた。

従道大西郷に叱らる

海軍擴張の時には、西郷従道が海軍大臣で、議會では、變つた演説をしたのぢや、「軍艦は鐵にて造り、大砲を射つものなり」といつた具合で、民黨の議員共を煙に巻いたのぢや。
その従道に「家屋敷を賣つて了へ」と私がいふた話か？
それはいふた。従道が、世道人心の頽廢を嘆き、奢侈の風を戒めなくてはいかんといふやうな事をいふから、私は、
「先づ貴下の邸宅を賣つて、それを時弊救濟の資金に提供なさい。仕事は頭山が引受けませう」といふやうな事をいふたのぢや。否や、従道は困つた顔をしない、却つて喜んでをつた。
従道は、兄貴ほどには行かないが、明治十年後は、従道を筆頭に、副島、品川などが人物で、それに鳥尾、三浦（觀樹）などもをつた。
従道は、なか〳〵の利けもので、明治初年政府が陸軍中將を任命する際、誰にしやうかといふ評議になつた。そのころの中將といふのは、今の大將以上の地位で、維新の豪傑連の中にも、一寸適任者が見當らんくらゐであつたのぢやらう。すると、大西郷は、遠慮氣兼ねの様子もなく、

「それには金吾がようございませう」と自分の弟を推薦したといふのぢやから、餘ほど重んじられてゐたものぢやらう。

大西郷が征韓論破れて故山に歸臥したころ、西郷の家に書生をしてゐた荒尾精の話では、一家の私事の如きは、更に顧みなかつたやうぢや。家屋は破れて雨漏りがひどい。奥さんが、そのことをいふと、西郷は、

「まだ解らんか！」といつたきり、奥さんも、何にも言へなかつたといふ事ぢや。

これはその前の話ぢやが、ある時の政府の會議の折り、西郷は遲刻ぢや。皆んなが待ち切れず、使をやると、西郷は、一枚の浴衣を洗濯したのがまだ乾かないから待つて呉れといふ。そこで浴衣を送つてやつと間に合せたといふ話がある。

従道は、ひどく大西郷に叱られたもので、彼れほどの豪傑も兄の前には頭が上らなかつたさうぢや。従道は、兄の俸給を皆なそつと持つて行つて費ふといふ風であつたさうぢや。それでもいろ〳〵と一家内のことを心配もしてゐたものと見えて、

「兄貴のやうでも、後で困ることにならう。己れが一つ工夫して生活に困らんやうにする」といふことで、地所を買つたり、家を建てるやうな算段をしたといふことぢや。

處が、大西郷がこれを知つて、非常に憤つた。

「汝は、碌なことをしでかさん。有害無益な奴ぢや、死んで了へ」と叱り付けたといふ。

子孫のために美田を買はずといふ詩は詩人の洒落にいつたのでなく、大西郷は肚の底からさう覺悟してゐたのぢや。それを、地所の家屋のと弟の従道が計畫したものぢやから、舌を食ふほど叱られたといふので、従道はそのことを話して、

「あんなひどい目に逢つたことはありません」といひをつた。

大西郷橋本左内に叱らる

大西郷は、二十八貫もある大男であつた。或時、鹿兒島で、大勢集まつて、相撲を取つてゐた處へ、橋本左内が來た。白面の書生と見えたぢやらう。西郷は、相撲は誰れにも劣けんのぢやから、橋本の弱々しい體格を見て、

「あんたは、相撲は取れまい」と、輕蔑する樣子でいつた。

橋本は、開き直つて、

「私はあなたを相撲取りと思つて來たのではありません」とやつた。

それから、盛んに議論を吹きかけて、容赦なく西郷をやり込めたので、西郷もあやまつた。

橋本が歸つてから、西郷は、

「今日失敗をやつた」といつて、袴羽織で、出直して橋本を宿所に訪うて答禮をいつた。

大西郷の師友伊知地正治

鹿兒島では西郷が第一の人物ぢやが、人格者としては伊地知正治の方が一段優つてをつたといふことぢや。伊地知は、南州自らが自分の師友と呼んでゐたほどの豪傑で、清廉は薩藩第一、仙骨は南洲以上といはれた。參議としてそのころ五十圓の月給取りが、家賃五十錢の借家に入つてをつた。戰爭は上手で、板垣も戰爭は上手といはれたものぢやが、板垣が何にか戰爭のことをいひ出すと、直ぐそれはいかんと頭から怒鳴り付けたといふ。不愛想第一といふ人間であつたといふ。

伊地知は、祿百石といはれた。元は小身で、微祿であつたが、鹿兒島灣で、英艦と戰つた時、伊地知は丸裸になつて、大砲へ馬乘りで戰つたので、その功で百石に加增されたといふことぢや。

何時か、米澤の中條といふ男が伊地知を訪ふと、伊地知は自分で不在だといふ、

「本人が居るではないか」と中條がいふと、

「本人がさう言ふのだから確かだ」と答へた話がある。伊地知の不愛想は有名なものであつたといふ。

仕事は西郷ほどやれんぢやつたが、人間としては伊地知は立派なものであつた。西郷が師友と敬してをつたといふのでも知れやう。

しかし、西郷がモツと畏敬した人間に久坂玄瑞がある。

大西郷の敬服した久坂玄瑞

「久坂が生きてをつたら、私共は大きな顏をしてはをれんのぢや」と西郷は、常に木戸に語つたといふことぢや。

久坂や高杉は若うして死んだのぢや、惜いものであつた。久坂は座右銘に「有事、無事の如く、無事有事の如し」と書いてをつたといふことで、鳥羽伏見の戰ひの折でもあつたか、長州の監軍の何んとかいふ男が、夜、陣中の見廻りをすると、皆な疲れて他愛なく眠つてゐる間に、久坂のみは燈下に端坐して書を讀んでをつたといふことで、それが無事有事の如しといふ心境なのぢや。

南洲が、征韓論の否決されて故山に歸臥した折り、木戸は、モ一度、西郷や副島を出さなくてはいかんというて心配をした。そして、大久保が、伊藤、井上輩を用ひるのを嗤つて鼠輩內閣と罵り、か

くの如き内閣は無きの優れるに如かずといひ、むしろ、空位にして置いた方が宜しいといふたさうぢや。

木戸、大久保を罵る

木戸は、征韓論破裂後、何んとしても、モ一度、西郷、副島、江藤、板垣などの元勳を廟堂へ引き戻して、折角維新の大業を終り有らしめなければならぬと、主張した。是等の人々が去つて、大久保が、伊藤、井上の徒を要職に就かしめたのでは、維新の業が無益になると、嘆いたものぢや。

「こんな事では、道義を本とする政治は出來ぬ」と心配して「五參議を舊に復さう」といふ、熱烈な希望を抱いて居つた。

「今日の事情、見るに忍びんから、已れは鄉里に退隱する」といふ。

伊藤はそれを見て、今此處で、木戸にまで去られては、親分の大久保はじめ自分等迄　惡評を蒙つて、立つ瀨がなくなると考へて、之を引留めようとする。

そこで、長州出身の鳥尾に賴んで、木戸を說かせる事にした。

鳥尾が伊藤等に其事を報告して、其晩遲く迄話をして居ると、十二時頃、自宅から使が來て、今、木戸さんが見えましたといふ。鳥尾は急ぎ歸つて見ると、木戸は默然と坐つて居つた。

徐ろに口を開いて、

「已れはモウ、こんな狀を見るに忍びんから、東京を去る決心をした」といふ。

「それは、貴下として女々しい事です」と、鳥尾は、大いに元氣を出して「鄉里に歸つて何をなされます。此處を一步も去つてはいけません。今此處で、思ふ事を存分に仰言りなさい。私が承つて、先頭に立つて、貴下の爲に死にませう」といふ。

木戸は之を聞いて、

「それなら言ふが、あんな伊藤、山縣、井上のやうな鼠輩に、がらにもない位を與へて居る事は、全く國を誤まるから、どうでも、五參議を舊へ戻して、國事に當らせなければいかん。あんな鼠輩は、寧ろ空位の方が宜しい、五參議が戻る迄は大久保と俺れと二人でやらう。それなら留まる」といふのだ。

山縣、伊藤に賴まれて來た鳥尾は大いに困まつたが、そこは、豪傑ぢやな。

「宜しうございます」と言うて歸つて、其儘を伊藤等に告げ「木戸の言の如くしなければならん」と

說いた。

伊藤、井上、山縣の三人は、顏を見合せて、大いに困つた。困つたと言つても埒が明かんから、それでは、

「岩倉さんへ行つて相談しよう」といふ事になり、翌日早々岩倉を訪問した。

岩倉は流石に、何んとも思はんやうな顏をして、

「木戸は然う言ふたか！　已れもさう思ふ。併し、已れはどうでもよいが、大久保は何んといふかな」

といふのだ。

そこで、今度は、鳥尾は大久保の處へ行つて、一切を語つた。大久保は癇持ちのやうな人間で、足を顫はせながら聞いて居つたさうぢやが、

「あゝ、然うですか。木戸さんが然ういふお話なら、今から御一緒に木戸さんの處へ行つて、モ一度直接に承りませう」とあつて、鳥尾と一緒に出かけた。

木戸は非常に大久保を罵倒した。

「貴樣のおかげで、折角の維新大業が壞はれた。凡て貴樣が天下を誤る」と聲みかけて罵倒した。

默つて聞いて居た大久保は、やがて口を開き、

「承知致しました。貴下の御趣意は御尤もな次第です。併し、已往は取り返せません。今後如何致して宜しいでせう、腹藏のない處を承りませう」

「西鄕等五參議が戻つて來る迄、お前と二人でやればよい。他の者は排除して了はう」

「宜しい、それも承知致しました」

これで話はさつぱり付いた。木戸の意志通りになるといふ好機會に、忽ち鹿兒島の亂となつて萬事休す。其中、木戸は病氣で死ぬる。

鳥尾のいふ事には、

「木戸が生きて居て、鹿兒島の亂が起れば、たとへ、殺される迄も、木戸は西鄕を諫めに行つたに相違ないのぢや」と。

木戸黑田を投げ倒す

木戸は却々の正直者で、伊藤などとは比べ者にならん大きい人間ぢやつた。それで、大久保との會見後、間もなく、大阪の料理屋で、木戸は板垣と會飮し、西鄕等を呼戻さうといふ事を、頻りと話して居る處へ、黑田清隆が入つて來た。大分酒に醉うて居た樣子ぢや。

そこで、木戸は、黒田に向ひ、
「今田談中ぢや、一時貴様は座を避けよ」といふ。
黒田は沖氣荒らく、激した聲で、
「君等の話を己れが聞いたつて差支ないぢやないか、秘密でもなからう」と反抗する。
「然んな事を言はんでも、ま、別席せ」と木戸は抑へる。
「譯を言はなければ去らぬ。どうして、己れが、君等の話を聞いて惡いかを言へ」と黒田。
「譯をいふのは何んでもないが、そんな事は、貴様が聞かん方がよからう」と木戸。
「是非言へ！」
「それでは、是非といふなら言うて聞かせる。貴様は、ずつと以前、まだ格別身分のない時の黒田は、見る聞くべき言動もあつたが、今、大いに重責の地にあり、君恩を忝ふする身分となつて、其の言動一も見るべきものなく、大いに劣つた奴になつた。さういふ奴共に謀る要がないから、避けよ、といふのぢや」
黒田は之を聞くや、滿面朱を注いで、木戸が便所へ立たうとする處へ鎌かけて投げ付けようとする。
「何を此の小僧が！」と木戸は、強力を誇つて居る黒田を一遍に投げ倒して、メめ殺すかと見えた。

木戸は武藝に長じ、力量もえらいものだ。板垣は見かねて、之を支えて留め、俥を呼ばせて黒田を歸したといふのぢや。

南洲の無頓着

南洲は、思ひ切つた事を平氣でやる、無頓着な人間で、些細な事にも其の一端が現はれて居るやうぢや。
南洲の友人で、奈良原繁の兄に喜左衞門とか言ふたのがある。是れが、同年配の親友であつたらしい。すると此の喜左衞門が、新婦を娶つて間もなく、上京した。南洲が、其の留守宅を見舞つた話ぢや。
「奥さん、喜左どんの○○と私の○○とは能う似てござる。でか○○ぢやて」といふのぢや。
新婦は眞赤になつて口も利けなかつたと、南洲の供をして行つた高島鞆之助の話ぢや、高島は南洲に愛せられて、隨いて歩いたのぢや。
然うか。南洲は、字を書く時、股の毛を吹き〳〵筆を運ばしたといふか。有りさうな話ぢや。南洲の大畧丸は名代のものぢや。

高田が斬られた時の事か？

何に？　保安條例の時の事か——。私は、あれには二度とも、何んのかゝりあひもなかつた。唯高田早苗が斬られた時、私は濱の家にをつたのぢやが、そこへ、警察からやつて來て、

「お手間は取らせませんから一寸お出でを願ひます」といふ。

私は「別に、警察へ行く事もない」というて出んので、今度は、

「それでは、濱の家へ此方から出向いてお聞きしたい」というて來る。

「それほどにするのなら、何にも役人が態々この家へ來んでもよい、私の方から出て行く」と答へて、やがて出向いた。

すると、高田を斬つた者を知らんかといふ事を何回も訊くのぢや。私は知らんと答へてゐるに、同じ事を繰返して訊くから、これは能う聞えんのぢやらうと思うて「知らん！」と大きな聲でいつてやつた。それで用が濟んで私は歸つて來た。

高田が讀賣の主筆ぢやといふので、番町に居つた若い者共が簡單に狙つて斬り付けたのぢやらう。血氣の者ばかりゐるので、新聞社の內部を調べもしなかつたのぢやらう。私は濱の家にをつた。

同じやうな事が大阪にもあつた。ある雜誌で、私の事を梟師とか何とか書いたのぢや。若い者共が、その雜誌社主を斬つてしまふといふから、私は止めた。

番町屋敷の化物

第二回目の保安條例の際にも、私は濱の家にをつた。福岡から來た若い連中が五十何人か、番町の方にをつた。その番町の家といふのは、化物屋敷と言はれ、二十幾間あつた。その中、一室に寢ると何か出るとかうなされるとかいつて、誰もよう寢んのぢや。私が寢て見たが、何にも出なかつた。

頭山が吏黨になつた

私が吏黨となつたのは、最初に、安場和と往來してでもよい、海軍擴張さへ出來ればよいので、私にしては、吏黨も民黨もないのぢやつた。國家の爲によければ、それでよいのぢやつた。

安場は今時にはない知事ぢやつた。佐々よりは二十も年が多かつた。かつて馬關で船遊びをした時、船べりから小便を放すと、烈風なもので、風下にゐる伊藤博文の頭へ飛沫が行つた。他の者なら低頭

平身謝罪する處だが「や、總理のお△△貸さんかい！　ワハヽヽ」と大聲で無遠慮なことをいつてゐた。

安場は、野心もなく、十年も福岡の知事をして、中央へ出て立身しやうなどゝも考へなかつたのぢや。……さうぢや隱君子の方ぢや。何時か高島（鞆之助）が、「安場の奴、キヤン〳〵いつて吠はん」などゝこぼしをつた。誰にでも遠慮會釋なく、氣に食はんと怒鳴り付けるので、皆んなが恐れてゐた。

「頭山を斬る」といふ

私が吏黨になつたのは、松方を助けて支那と戰ふ準備をしようといふ考へであつたが、民間黨は、私を藩閥政府に降つたといふので、斬つて了ふといふのぢや。

此時は、警察の方からも、再三注意があつた。民間黨の方でも、賭博打ちなどを手先きに使つてまで私を狙はせるといふ。私の方の玄洋社の壯士と三多摩壯士とが睨み合ひぢや。

その折、民間黨壯士の牛耳を執つた大井憲太郎が、私と一度會つたら私を信じて莫逆の仲となつた。當時、大井憲太郎は、鍋町の福吉旅館にをつた。私は、單身そこへ出かけて大井に會つたのぢや。會うて語ると、大井は私と離れんことになつた。百年の友のやうになつた。それがために、今度は大井が民間黨から排斥されることになつた。大井が私の味方になつて、星（享）が代つて三多摩壯士の頭になり、大井と睨み合ふたのぢやが、大井は星を眼中に置かなかつた。

小身非力の豪傑大井憲太郎

大井憲太郎は小身の豪傑で、氣の強いことは大したものであつた。小身非力ぢやから誰と取組合つても直ぐ下にされるのぢやが、氣魄の強いことは驚くべきもので、どんなに負けたからつて負けたとはいはん。人を見ると、直ぐ「馬鹿野郎」と來るから喧嘩になる。體力では負けるが、精神は決して負けない、生命など氣にしてゐなかつた。大分の人間としては異數ぢやつた。大井は、何時も爆裂彈を澤山貯へてをつた。

星も、伊藤も、私を仲間に引入れようとして、政友會になつて吳れと賴んだのぢや。それを、大井は「そんな事はいかん、詰らん。いつそ、彼奴等臆病者共を倒して、我々の手で天下を取つて了つた方が、手早い。政友會へ行くよりはその方が宜しい」といつて、河野（廣中）と私と三人で、相談をしたのぢや。

これは、河野廣中の記念品として贈られたものぢや」と、翁は一本の古筆を示した。その軸には。

「盤州逸品」と彫られて、毛は使用して可なり切れてゐた。

河野の死後、これと千五百年前の瓦を硯にしたのと二品を贈つて來た、……然うぢや、記念としてよい趣向ぢや。三浦（觀樹）からの記念の中に如意があつた。……然うぢや、それ〳〵趣向が面白い、長く生き殘る者は、皆んなから、かたみ分けを貰ふのぢや。

大井の臍

大井憲太郎が、喜んで來て、

「小坂の鐵鑛が五萬噸ばかりあるから、大分の金になる。製鐵所へ買つてもらひたい」といふ。

それアうまい話ぢや、早速やるがよいといふ事にして、私が製鐵所長の和田維四郎へ頼んでやつた。

處が、蓋を開けて見ると、五萬噸どころか、二千噸もないといふのぢや。

「なんだ、女の臍へ、つばを付けて押したところで何になる。貴樣の鐵鑛は臍の方ぢや」と言うてやつたら、大井のやつ、笑ふに笑はれず、泣くに泣かれず、悄氣た。以來大井の臍といふことにした。

星も大井には閉口

星（享）は、相當肚の太い奴であつた。深く交る迄に至らなかつた。といふのは、星の敵たる大井と深く交つたからぢや。星は、俺れにも政友會へ入つて、纏めて呉れといふから、

「俺れよりは大井を入れるがよい」といふと、

「大井は直ぐ向ツ腹を立てますから」と言つた。大井の眼中、星などはなかつたのだから、星も大井には閉口ぢやつたらう。

星が私を議員に擔がうとした

星が、私の所へ來て、政友會を組織するから、是非仲間へ入つて呉れといふのを斷つたら、今度は、私を議員にするといふので、準備をした。折角かつぎ上げた後で、叱られては堪らぬから、默許してもらうつもりで、自由黨の壯士頭で川上といふ、二人も人を斬つたとかいふやつをよこして、其事を承諾を求めた。

私は、途方もない、默許も何も出來ぬと斷つてやつた。私が議員にならうと思ふなら、疾くになつ

たので、最初、玄洋者の者が其つもりにして、社の財産を皆な私の名にして議員にすると極めたのぢや。私は、反對に、自分の金を一萬も出して、福岡から四人も議員を出してやつたのぢや。折角、準備したものを、私がはねつけたもので、玄洋社の者共は失望して、今後は凡ての運動をしてやらぬと駄々を言つた。

星を助けた

星は、私を横着者と言うてをつたといふ事ぢや。自分が横着者ぢやから、私も然う見えたのぢやらう。星は、伊庭にやられる五年前にも、一度やられる處を助けてやつたことがある。爆裂彈でやつつけるといふ奴がをつたが、私は「まア、助けて置け」といつて留めた。星には二度ばかり會ふた。最初は政友會の出來る時で人間がなくて困るから、私に一つ出てくれといふやうな話であつた。二時間ばかり會つて夕飯を一緒に食ふた。

劍難もぐり

人相觀が私の事を「劍難もぐり」といふた。その後平岡（浩太郎）と、他二人でまた別の人相觀に會ふた。他二人は、樂に世を送る人といふ觀相ぢやつた。さて、平岡の番になつて、「此人は名を揚げる人」といふことであつた。

私の番になると、矢張り、「大きい事をして名を揚げる人」といふのぢやが、「但し、あなたは、危險な事をする人です」といふた。

この時、一座客「あなたは、笑ふ時可愛い顏になりますが、怒つた時は恐いのです。何にもいはんでも怒いのです」

翁破顏一笑。

「聞いて怖ろし、見て恐らしい、添うて嬉しい頭山さん」といふのを藝者共が謠つたのぢや。

その後も一度、杉山（茂丸）と二人で或る人相觀に會ふた。杉山のことを、天下の富を成す人ぢやといふた。私の事をば「長命はするが、一生貧乏する」といふた。

地稅輕減問題

地稅輕減問題の時ぢや。

「天下みなそんな俗論に傾くやうではいかぬ。今は、一時の苦痛を忍んでも、大いに財用を裕かにし

て對外策を講じなくてはならん時ぢや」といふので、香月恕經に、これが反對をやらせた。何んでも今年は五十人の味方があつたら、來年は滿場一致になるまでに努力せよといふので、それには香月は、耳が聞えんから、敵黨のいふ事には知らん顏して飽くまで反對せいといつてやつた。遂にその通りになつたのぢや。

松方總理を叱る

松方總理の時は、うんと怒なり付けたら、椅子からひよいと立ち上つてまた坐つた。

その前に、言質を取つて、私が助けてやるからには、徹底的にやらなければいかんといふと、宜しいと約束をしてをつたのぢや。それが、民間の奴等から騷がれて辭職をする、內閣を投げ出して逃げるといふのぢや。私の立場がなくなる、品川や、安場（和）など〳〵策謀をして選擧干涉もやる。どうでも吏黨の議員を多く造つて、製艦費を可決させ、海軍擴張をやるといふ事で、松方に乘切らせるつもりであつたのが、投げ出すとなると、私の吏黨も無駄骨ぢや。それで、私が、出かけて行つて、うんと叱り付けたのぢや。人間はびつくりすると、はね上るものぢや。當時、伊藤などが、我々のやり方がひどいので、氣を揉んで、

「こんな事では、困る。頭山などの亂暴な事を聞いて、支那と戰爭でも起したら、日本は負ける」などゝ心配をして、頻りと松方へ說いたのぢやらう。松方は根が正直者ぢやから、伊藤あたりからそんな事をいはれると、居堪らなくなつて、逃げ出したのぢや。

伊藤は能く人才を用ゐた

その折り、私は、遠藤秀景と二人で、二日續けて伊藤を訪ふたが、をらんとかいうて、たうとう會はん事ぢやつた。

その後、伊東巳代治が濱の家の嬶を說き付けて私に會ひたいといふのぢや。

「會ふ用もないから」というて置いたが、濱の家の嬶が、再三、然ういうて、一度會うてやつて下さいといふものだから、會ふた。

伊東巳代治は、頻りと辯解をして、

「伊藤さんも、そんな惡いつもりではなかつたので、全く不在でお會ひが出來なかつたので」といつたやうなことを骨を折つて辯解しをつた。

その後に、伊藤自身が、私に會ひたいというて來た。が、今度は私の方から「會ふ必要はない」と

斷つた。

その後、日清戰爭前、始めて伊藤（博文）に會ふたのぢやが、その時伊藤は

「頭山さんは子分を澤山お持ちでせう」といふた。

私を町奴共のやうに思ふたのぢやらう。

伊藤は人を用ひた、自分の鄕國の長藩の者ばかりでなく、能く人才を集めて仕事をした。從つて人望を得た。賢い處があつた。井上の方は、下の者へばかり我儘をいつたもので、伊藤よりは劣つてゐたらう。伊藤は勇氣が缺けたやうぢやが「私心」が少なかつた。

品川へ借金の相談

私の芝の櫻川町時代といふのは、借金時代ぢや。松方を叱り飛ばして見たが、松方は內閣を投げ出して了つたのぢやから仕方がない。吏黨になつて最後まで突張るはずが、こんなことになつて、私の立場がなくなつた。濱の家から足を洗つて櫻川へ轉つたのぢやから、金に困るは當然ぢや。

そこで、或時品川の處へ金を借りに行つた。

「今日は、あなたに御相談があつて參りましたが、些と金が入用なのです」といふと、品川は、大いに驚いて低頭平身、

「外のことなら何んでもないが、金のことばかりは私には出來ませんので、實に困りました」と如何にも困つた樣子ぢや。

私は、氣の毒でもあり、

「あなたに、金のことはお門違ひとは存じてをりますが、出來る出來んは別として、あなたなら御相談して宜しいと信じてをりますので、申したやうな次第で、實はあなたにお出來にならんのが當り前と思うてをります」といつた。

別れて歸る時、品川は、

「迚も私には、金の事は駄目と思ひますが、何れ丈けの事でせうか、夫れだけを伺つて置きたいので」といふから、

「いや、一寸入用なので、五百圓ばかり」といふと、品川はまた驚いて、

「私は、あなたの事ですから、途方もない大金の御相談かと思つてお斷りしたのですが、五百位なら、私にでも何うにかなりませう、後でお屆け致しませう」といつて、和田維四郎に持たして、直ぐ私の宿へ屆けてくれた。和田は私にも雙方に懇意なので、その邊も品川は思ひやりがよいのぢや。

その金高は六百圓ぢやつたが、翌日には古莊（嘉門）に又五百圓持たせてよこした。

品川は、何萬といふ金額と思つて、最初低頭平身、恐れ入つたのであつた。正直潔白な男で、吉田松陰の門生中一番年少で、松陰の衣鉢を最も好く繼いだ人といはれる。表面は優しく、猛烈な處はないが、やるとなつたら、實踐躬行水火を辭せざる氣魄はえらいものであつた。

私も、後藤（象二郎）になら百萬圓の相談を持ちかけるが、品川にはそんな間違つた話はしないつもりぢやつた。

品川は善人ぢやつた。

品川ばかりは、決して惡錢を取らなかつたやうぢや。何か當節の利權屋のやうな賄賂を持つて行く者があると、品川は、

「私はやるべきことなら、あなた方から望んで來なくともやります」といつて、その持つて來たものは皆返したといふことぢや。

そのころ、岩崎から金を取らん者はないといふほどであつたが、品川ばかりは、三萬とかを持つて來たのを取らんで返したといふことぢや。直情徑行で、才物で、溫順しい人間ぢやつた。選擧干渉も、品川がやつたといふよりは、俺共がやつたやうなものぢや。品川の發意ではなかつた。內務の地位にゐるから、責任が落ちて行つたのぢや。善人であつた。「とことんやれ」の歌も、品川が作つたので洒脫な處もあつた。

丸裸で高利貸擊退

信濃屋の二階にゐる時ぢや。晝寢をしようといふ處へ、高利貸の奴が二人揃うてやつて來た。一人では、毎々のことで、文句もいひづらいから、誘ひ合せて來たのぢやらう。下座敷へ待たせて置いて、一先づ晝寢をした。二時間もして目を覺まして、

「まだ、彼奴らがゐるか」と聞くと、待つてゐるといふ、挺でも動かぬ了見らしい。

それから、私は丸裸で、下座敷へ行つて坐つて、一人の顏をずうと見た。二人は丁寧に叩頭をして、

「お金は、何時頂けませう」といふ。自分の金を人に貸したのだから、返してもらひたいであらう。私の方でも、返したいは山々だが、今はない。

「金が出來たら、此方から返しにも行かう、また呼びにもやらう。その方共の催促を受けるまでもない、そこの處を了解して貰ひたい」　此方も丁寧にいい、返したいのぢや。無いからどうも仕方がない、

つた。
何せよ丸裸で出たので、着てゐる物でも取つて行くともいへないのぢや。
「ハアー」といつて、何んにもいはず歸つて行つた。

國民協會入黨拒絶

國民協會が出來る時ぢやつた。
私は、松方内閣瓦解後は、一旦民間黨をやめて吏黨になつたのぢやから、モウ隱退ぢや、世間のことには口を出さんつもりでをつた。
すると、品川、佐々、古莊に松方、西鄕（從道）などで、國民協會を造るから、私にも出て呉れといふ。私はその時、「思ふことがあるから出ぬ」と斷つた。
すると、二度も三度も、呼び出しに來る、山本といふ警部長を使ひによこして、
「あなたが、會合の席へお出で下さることが、御都合が惡ければ、此方から伺ひませう」といふのぢや。
「それほどまでにいふのなら、私の方から行くから、來るには及びません」といつてやつて、私の方

から出かけた。
國民協會の連中が顏を揃へて待つてをつた。私は、その席へ出て、かういふた。
「世間には、やるというてやらんのがある。又やらんというてやらんのがある。私はやるというてやらんやうなことはせん。私は、今度のことは、やらんというてやらんつもりぢや。私はモウ一切何處へもそんな政黨などへは出んことに思ふとる。若し、一旦國家の大事で、是非にも出なければならんと思ふ時には、君等の催促は受けん。私から出る」
斯ういうて座を起つたら、誰も引留めなかつた。皆な私のいつこくを知つとるからぢや。

大津事件の時

青木周藏が外務大臣の時、その下にゐた赤羽四郎が湖南事件の日、私の處へ來て、
「先生、大變な事が起りました」といふ。津田三造が露國の皇太子を大津で傷けたのぢや。
「今直ぐ戰爭が始まるとよいのぢやが、これで戰爭にはならん。ま、安心をして私の淨るりでも聞いて行け」と私はいうて、當時濱の家にをつたのぢやから、濱の家の嬶を呼んで三味線を彈かせ、太閤記十段目を十日ばかり稽古した處を語つてやつた。

赤羽は、手をこんな風に頭へ上げて、「頭山さんの淨るりは始めてだ」と大笑ひをして歸つた。

あれも、役人にしては變つた男だ。會津の三四郎というて、柴四郎、池上四郎と三人男に立てられたものぢや。後に、肺病になつてからは、何處へも行かずに私の家へ來て「この家なら來てもよからうと思ふ」というて、餘ほど惡くなつてからも來てをつた。

何に？　赤羽が動けなくなつてから、私が見舞つて行つて、碁を打つてやつたといふ話か……負けくやつて病人を喜ばせた？……うん、そんなこともあつたやうぢや。

硬骨漢兒島惟謙

兒島惟謙は硬直な奴で、策略の人ではないが、眞向からぶつかつて行くやり方で、所信を曲げんのぢや。あの大津事件の時、裁判官であつたのぢや。津田三造が露國の皇太子を傷つけたのを大逆罪に問はうと皆んながいふのを、兒島だけは單なる傷害罪であると主張して、最後まで頑張つたのぢや。それで、我國の體面も保たれたのぢや。そのころ星亨は勢力を張り、三多摩の壯士を率ゐて威張つてゐたが、兒島の眼中には星など無かつたやうぢや。議院の廊下で出會はして、星を面責したといふ話もあつたやうぢや。

日露戰爭、桂太郎

日露戰爭直前のこと、兒玉、小村、八代などが見えて、どうでもロシヤと一戰を交へて根本的に解決するほかないといふのぢや。私も贊成したのぢや。八代がいふことに、

「之は、半年遲いと早いとで、大變な違ひになります」と。

一日も早く開戰しなくてはならんといふのぢや。それから、私は時の總理桂に會うて見た。桂がいふには、

「此際、ロシヤに對して滿韓交換などいふ事は決して致しません。私は肉體の頭は下げても、精神の頭は下げません」といふ。これは脈があると思つて話を進めたのぢや。すると桂は、

「從來國家の大方針が定まりませんので困りましたが、今度はきまりました」とはつきりした返事ぢやつたので、私も安心した。

桂は軍人でもあり、伊藤、井上如き軟弱な者ではなかつた。あれが伊藤や井上の內閣だつたら、日露戰爭は出來なかつたらう。井上は、雷などゝいはれたやうぢやが、それは、自分の部下や、出入りの町人共への雷で、あの男は我輩を恐れて一度も面會しなかつた。

大分早いころ、大隈の條約改正の前ぢやつた。井上が福岡へ來たことがある。すると、來島が彼れを生かして歸さぬといふのぢや。その相談が定まつて、私の處へ承諾を求めに來た。

「ま、一時生かして置け」と私は止めたので、井上は三十年生き延びたのぢや。

その以前に、近衞內閣を造つて、對露問題を解決しよう、そして新日本を造らうといふ話があつた。根津一が來て、その內閣の獻立、顏觸れを見せたのぢや。近衞公を總理にし、佐々、神鞭、小村などが閣員になり、私も夫れに加はれといふのぢや。然るに、間もなく近衞公が死なれて惜い事であつた。

近衞公は、しつかりした肚があつたやうぢや。物いふ事のやさしい人で、私が會つた時「私は井上さんは、伊藤さんよりも嫌ひです」といつてゐた。

シルクハット問題

私は、不精者で、四十ごろまでも袴を穿いた事が殆どない。褌もないのだから居ずまひを惡くすると、險呑な事ぢやつた。それで、大臣だらうが、總理だらうが、遠慮なく訪問する。日露戰の前の事ぢや　神鞭その他四、五人揃うて、伊藤（博文）を訪問した時も、矢張袴なしで出かけたのぢや。二度目の伊藤訪問の折、神鞭は氣にして、

「伊藤さんへ出る時ばかりは袴を着けた方がよいでせう」といふ。そこで、私は始めて袴を穿いて訪問したのぢや。歸る時、振り顧ると、神鞭は窮窟さうに洋服を着て、シルクハットを被つてゐる。

「僕は一生そんな物は被らんぞ」といつて笑つたのぢやが、たうとう神鞭に對して嘘を吐いた事になつた。一昨年の御大典の時、京都へ出かけるに、シルクハットを被つて洋服を着たのぢや。神鞭（知常）は清廉と人情深い點は、群を拔いてをつた。誠に、正直でさつぱりした男であつた。

聽かなければ伊藤を斬る

日露戰爭の時は、今日、米國に對する以上に、政府の連中が露國を恐れて居つた。私は直覺で以て露國など恐るゝに足らんと感じて居た。それで、若し伊藤が戰爭を恐れるといふなら先づ之を斬つて後露國と戰ふつもりであつた。

南洋視察費を飮む

松隈內閣の時、大石が農商務大臣になつた。大井が來て、

「農商務省に金があるから己れに南洋視察に行かんかといふがどうぢやらう」といふから、

「幾らあるのぢや」ときくと、三萬圓ばかり遊んでゐるといふ。

「しかし、それを皆出す譯にも行かんといふことぢや」といふから、

「皆でなくともよい、出かけるがよい」というてやつた。すると、また大井が來て、

「途方もない、たつた二千圓しかよこさんといふのぢや」とふくれるから、

「二千圓でも取れるなら取つて來い」といつてやつた。その金を取つて來たが、二千圓ばかり詰らんと大井が呟いた。

「それでは一つ貴樣の送別會を兼ねて皆んな呼んで飲まう」といふ事になり、大石や河野その他多勢呼んで、己れは、遠慮なし食うて居ると、大井は大井で眞先きにへゞれけで、散々罵倒をやる。

「大臣なんかといふのは、餘程へなちよこな奴がする事ぢや」などゝ、途方もない事をいふのぢや。私も、御馳走を食うて、妓共に戲談をいつて、招んだ連中に一向お構ひなしぢや。で、二千圓は、この大振舞に消えて了ふた。處が、農商務省の方では、行くというて取つた金が、振舞でなくなつたでは困る。どうでも大井が南洋へ出かけてくれなくてはいかぬといふのぢや。大井の奴、向ふ腹を立てゝ、

「二千圓ばかり何んぢや。鼻糞の樣な金で、彼れこれいはれて堪るか、そればかりの金は元へ返したら文句は無からう」といふ。それでも、その金は、おいそれと直ぐ出て來ないのぢや。大石か、又二千圓拵へて來て、大井は南洋へ出かけた。後で私は大石に會つて、

「大井の旅費二重取りの張本は己れぢやよ」といつたら、

「うゝん！」と大石の奴眼をみはつてをつた。

金の貸しつぷり金子元二郎

北海道の炭坑を買ふ時、金子元二郎が見えた。實は四萬圓で買取る話でをつたのぢやが、二萬圓は出來て、後の二萬圓が無い。金子は商人で親の遺産もあり、相當資産があつた。何んでも、支那の方へ出かけるとかいつて、その途中、私の處へ立寄つたのぢや。

「急に要る金で、二萬圓ほしいのぢやが」といふと、

「どうも、急な事では、私も旅中ではあるし、方法は付きませんが」と金子の答へぢや。それも尤もな話で、私の方でも借りる金を無理もいへんのぢや。その中金子が、「その期日は何日ごろまでに間に合ひますれば宜しいので？」といふから、「長くは待てん、三週間ばかりといふことで、彼方に待たせてあるのぢや」といふと。金子は考へてをつたが、

「左様に期日が迫つてゐるのでは、彼れこれいつては居られません。それなら、私が一旦家へ歸つて持つて參ります」といつて辭し去つた。

何んでも、番頭共が留める、家内も不賛成といふので面倒であつたらしいが、然うと一旦決めて歸つたのぢやから、否や應なし持つて行かなくてはといふて、二萬三千圓を持つて又私の處へ見えた。それを皆な出したから、「その三千圓は何にかの」ときくと「これは先生當座のお小遣ひに」といふ。「否や、それは有難い事ぢやが、二萬圓あれば宜しい。その三千圓はあつた處で私は有れば直ぐ使つて了ふ。無ければ無くて濟む。同じ事ぢやから其方へ藏つて置いた方が宜しい」といつて返した。後で、その炭坑が賣れた時、十倍にして金子の貸しツぷりがよかつたから、私も返しツぷりを好くしてやつた。

炭坑を賣つた七十萬圓の行衛か？

「何に？……炭坑を賣つた七十萬圓の行方か？……借りてゐた金の方が多かつたので、直き無くなつた」

座客「先生は一生借金生活ですな　二十代で、三萬圓の借金を造られたと聞きますが？」

翁これを受けて無造作に、

「そんなことであつた。一番最初の借金は、福岡にゐるころで筒井主稅といふ男からであつた。私よりは八歳も年が多い元は武士ぢやつたが、床屋をやりをつた。この床屋が借金の始まりぢや。女の方も床屋の案内が始まりで、これは東京へ出てから芝口の床屋ぢや……然うぢや床屋で髪を刈つてゐる處で見た妓を、その床屋に案内さしたのぢや。

この筒井主稅といふのは、早くから知つたのでなく、二十歳後の交際ぢやつた。矯志社で顔を知り合つたのぢや。それが、十圓、五圓と直ぐ金を貸してくれた。そのころは、東京の下宿は二圓もあればゐられるといふので、十圓は大金ぢやつた。

借金證書は正氣歌の文句

證文は、返すまでのしるしに正氣歌の一句を書いたりしたものぢや「鼎鑊甘如飴」などいふので、金額も、返濟期日も書いてないのぢや。その方は、ほんの小口の方で、それから追々と借金も太くなつた。炭坑區を願ひ下げたのを抵當に千圓、五百圓、三百圓などゝ、段々積つて三十ごろには三萬圓ばかりになつた。

東京へ出てから、高利貸共から借金をした。何んとか徳藏といふは金貸しは今も生きてゐるはずぢや、私より年が多い筈ぢや。モウ八十にもなるぢやらう。

支那へ入院したやうぢや

第一革命の時、支那へ行くに、腸が悪くて、皆んなが、

「先づ入院でもして、身體を治してから行け」といふ。

併し、私は生來の頑健ぢや。三尺も深い雪の中でも、百姓共が足拵へをしてやつと出る時、私は、足袋も穿かず、睾丸が出る程のさまで、雪藪を歩いて、何んともなかつた位ぢやから、支那へ行からといふ話が出來て、今更ら入院でもあるまい。

「俺れは三十年、歳を投げ棄てゝ、若くなつて行くから、貴様達も三十年棄てゝ來い」と若い者共に言つて、十人ばかり連れて出かけた、寺尾（亨博士）なども行つた。

すると、彼地へ渡ると、却つて達者になつて、何んともなかつた。

支那へ入院したやうなものぢや。

彼方へ渡つては、唯だ黎元洪と無言の挨拶をした丈けぢや。船中で犬養と碁を打つた。

美和も氣の強い奴ぢや

私が最初に支那へ行つた時、彼地――で、大勢客をした。その席で美和作次郎が、客に呼んだ柴五郎を撲つた。美和は氣の強い奴で、醉ふと手を出す。散々柴五郎を打つたから、私がうんと懲してやつた。翌朝醉ひが醒めると、あやまりにやつた。

その後も一度酒席で、美和がまた荒れ出した。懲してやらうとしたが、犬養が留め男に出た、美和も氣の強い奴ぢや。

この第一回の支那行きの歸りに朝鮮へ廻つた。京城で、統監の寺內が私共の歡迎會を開いて呉れた、洋食が出たのぢや。そこで寺內は、

「頭山さんは洋食はお嫌ひで御ざいましたらうか？」といふ。食ひにかゝつてから然ういふのぢや。

「私は洋食は嫌ひぢや。それでも一人前は食ひます」と答へて、私はきれいに食ふた。

佛人リシャール來訪

洋食を嫌ひなやうに、私は西洋人も嫌ひぢや。何時か、フランス人のリシャールといふのが私の家へ

へ見えて、私の寫眞を持つて來て「私の記念にしたいから、先生の署名をして下さい」とかいふのぢや。そして、ペンを出した。

その時、私は、

「私は、西洋人が嫌ひぢやから、一度も、私の處へ、西洋人が來た事がありません。あなたは始めてです。又私は日本の筆を使ふので、この金屬で作つたペンを使ふのも始めてぢす」

といつて、そのペンをかう筆の樣にして書かうとすると、ペンがピンと飛んで行つた。リシヤールは、

「私は西洋人ではありません。西洋人を止めました。西洋文明は、皮が美しいだけです」といふてをつた。

大隈との會見

大隈とは、板隈內閣の時、はじめて會ふた。最初私にも、その內閣へ入つて呉れといふから「いや、おれは入る要はない、おれの北海道の山へ五十萬位、三菱あたりから出るやうに、それを取計らつて貰ひたい」といふやうなことを言ふてやつた。

そんな無理難題を吹つかけて、相手にもならなかつたのぢやが、一日、鳩山和夫が使者になつて來て、

「是非一度大隈さんがお會ひしたいから御都合の日を」といふ。

「私は何時でも宜しいが、不自由な脚でこんなせまくるしい處へわざ〳〵出かけんでも、私の方から行つて會はう」と答へた。すると、また鳩山が來て、

「明日は午前、客を謝してお待ち致しますから、どうぞお出でを願ひます」といふ。

それで、私は出かけて大隈の家で會ふた。大隈は「若い人に讓りたい」といふやうな事を頻りといふ。國家多難の際ぢやから、維新の際の豪傑が何れも若手揃ひで回天の事業をやり遂げたやうに、日本が世界に對してやる大仕事も、若手でやりたいといふ意味ぢや。口が達者なのぢやから、そこのことを立派にいふ。

「いや、それはいかん、あなたが、すでに實權を握つて、責任の地位に立つてから、そんな事をいふのはいかん。支那に對する政策などは實際是非決定して斷行せにやならん」と、私は押へて、

「支那のことは、大きな戰爭に金を費つたと思うて、平時の外交にそれだけの金をかけなさい、大膽にやらなくては」といふと、大隈は伊藤などよりは、膽氣もあるやうで「それはやりませう」と承諾

をしたのぢや。そして、別れる時には「今度これを一ツやりませう」と、手眞似で碁を打つ約束をしたのぢや。

しかし、外交に金をかけるといつても私のは何億といふもので、大隈の肚とはけたが違ふのでやり切れんぢやつた。その後、夕張炭坑のことを杉山（茂丸）を介して突込んで見たが、話は纏まらなかつた。

室蘭埋立願ひ

北海道の炭坑會社が四萬坪ばかりの埋立てを出願するのに、頭山が個人で八萬四千坪の室蘭港埋立出願は多過ぎるといふ苦情が役人共から出た。その時、長官の安場は役人共に向ひ、「他の者なら多過ぎるといふ事もあらうが、頭山には、多過ぎるの、廣過ぎるのといふ事はない」といつたので、私の埋立願は許可になつた。

安場がこんな事をいつたに譯がある。最初私が福岡で五十何萬坪の炭坑を土地の者と共同で出願したことがある。これについては、土地の郡長の久野や、知事の安場も心配して呉れたのぢや。五十萬坪と口でいふと小さいが、隨分廣いものぢや。そこで、ほかにも出願者があるのぢやから、それと半分づゝ分けて呉れると仕合せぢやといふ。私はこれに答へて「五十萬坪、百萬坪といふ土地は相當廣いものである位は私もよう知つてゐる。しかし、私が石炭山を手に入れやうといふ意志からすると、豐、筑の坑區を悉く私が手に取つても、大海の一滴ぢや。私に多過ぎるといふ心配はいらん。若し、他日、頭山に、百萬坪の坑區許可が多過ぎたといふことになつた際には、私の首を取りに來るがよい」といつてやつた。すると彼方では「左樣でございますか」と引退つたのぢや。

この話を安場が能う知り居るので、今度の北海道の埋立出願も、多過ぎるといふことはないといひ添へをして呉れたのぢや。それで室蘭埋立が許可になつた。處が、石垣もなし、その埋立區域が判きりしない。その中一萬坪ばかり埋立てたのが風波で流された。

その中河島醇が北海道長官になつて、この埋立の事を知り「折角許可になつたものを、その儘放棄して置くのは惜い」といつて注意をして呉れた。兎に角、それだけ圍ひをつくれば宜しいといふから三千三百坪を圍ひして工事を始めた。それが、今も殘つてゐるのぢや。

頭山の嘘は公然

陸奥宗光が外務大臣の時、同じ紀州の岡本柳之助が來て、私に南洋へ出かけてもらひたいといふ。

陸奥の手から三十萬圓を出すといふのぢや。

私はかういつてやつた。

「兎に角三十萬圓持つて來るがよい、但し已れは南洋へは行かんのぢや。頭山の嘘は、公然とやるのぢや、名乘つて置く。しかし、有り餘つてゐる金があるなら已れはそれが入用なのぢや」

「そんなことはんで、ま、出かけるときめなさらんか、その中五萬圓ばかり私に融通してくれることに」と岡本が頻りと勸める。

何んでも陸奥は、私を南洋へ追つ拂つて壯士共も一緒に連れて行かせ、その後で、條約改正をやらうといふ肚と私は睨んだから、出來んやうな注文を出してやつたのぢや。大隈の爆彈以來、條約改正にはこの爆彈が恐いものぢやから、恐い顏を皆んな南洋へやつて、その留守にさつさと條約の方を片付けやうといふのぢやつたらう。岡本は、面白い奴で、働ける奴であつた。後では困つてゐる樣子で「知事の口でもいゝが無からうか」と言ふてをつた。

その後、岡本は、朝鮮へ渡つたが、順調に軍人で出世したら、えらい元師になつたことぢやらう。陸奥とは、遂に一度も顏を合せなかつた。この時、私が南洋に行くことにしたら、陸奥とも會うて話さにやならぬのであつたらうが、行かないことに最初きめてをつたから、會ふ要もなかつたのぢや。

青木周藏は變り者

青木が外務大臣の時ぢや、明治三十六年ごろぢやつた。私の炭坑を米國人と共同でやりたいといふ事で、赤羽四郎が使者になつて來た。先づ十萬圓は、私の當座の小使ひによこす。それから、三十萬圓の會社にして石炭を掘る。この資本は全部米國人の手から出す。それで利益は四分六分に分けるといふのぢや。

私は、又例の緩和策ぢやと氣が付いた。十萬圓などといふことで、我々を去勢して置いて、條約改正をやらうといふ肚らしい。そこで私は、

「それは勿論、頭山の方が六分、米國人へ四分といふことゝ信じてはゐるが、しかし、私は、一體四分六分などいふ吝なことは嫌ひぢや。凡てが對等の五分五分で行くのが頭山の立て前ぢや。よつて、この話も、五分五分の分配にする。十萬圓など先取りはいらぬことぢや。五分が一厘缺けてもいやぢや」といつてやつたら、それきり話が止んだ。

青木とは二三度會ふた、ロシヤと開戰にでもなつたら困るといふので、心配をしてゐるから、私は「そんなに心配せんでもよい。どうせ一度は戰爭をせにやならんのぢやから、それは必ず覺悟を定め

てをれ。併し、今が今戰爭にはならん。大體の見當をして置いて、餘りくよ〳〵心配せん事ぢや」といつて、それから、地獄へ落ちた話をして聞かせたのぢや。

「私が、地獄のやうな處へ落ちて行つて、閻魔と戰つた話ぢや。閻魔が高い處にをつて行く手を塞ぎ居る。後の門は嚴重に閂がかゝつて逃げる口はない。そこで、私は覺悟を極めて閻魔へ突つかゝると、閻魔が一堪まりもなく瀨戸かけの様に碎けたのぢや。」

青木の奴、本に書いてないことは承知せんといふ妙な癖があつて、私のいふたことが本に書いてあるのぢやらうといふので、毎日、書齋に積んだ本をひつくり返してをつたといふのぢや。とう〳〵同じやうな話が見付かつた。何んでもドイツの皇帝が佛國との戰爭に負けて意氣鎖沈した時、ビスマークが、夢物語りをして皇帝を勵ましたといふ話ぢや。何か斯う谷間に追ひ詰められて、斷崖絶壁といふやうな、逃げる路もない處でビスマークは一方の斷崖目がけて突つかゝつて行つたら屏風でも倒す様に、其處が開けて活路を得たといふやうな筋ぢやといふ。それで、青木は、

「頭山の話と同じぢや、本に書いてあるわい」と言つたと云ふ事ぢやつた。

權兵衞大臣

山本權兵衞は、時と處を得なかつた。大いにやるはずであつたが、相撲取りでも、場所で病氣などして出世が出來ないやうな不幸がある。シーメンス事件の打擊で、敢なく攻落された。惜いことであつた。

山本は、權兵衞大臣と、早くからいはれた位で、大臣總理の貫祿が早くから備はつてゐたのぢや。

孫文をどうする

山本權兵衞に最初の交涉は、孫文が亡命の時だつた。當時、支那は袁世凱が總統で、孫を邪魔にして排斥する。支那公使は伊集院（彦吉）で、山本の意を受けて孫が日本を經由して米國へ赴くといふのをやるまいとする。そこで、私は、寺尾（享）を山本の處へやつて「亡命者孫文をどんなことにするか」と問はせた。

すると寺尾は歸つて來て「山本が大變ぶあいしらひなことをした」と憤慨する。何んでも、山本のいふには、孫が來ては迷惑だからといふて排斥する樣子ぢや。それで、寺尾は頻りと不平をいふ、埒が明かん。私の考へでは、今は袁の世の中であつても、將來支那は孫の時代が來る。たとひ、孫は米國に行くにしても、日本を通過するなら、此方に引きよせて宜しいものを、殊更にこれを追ひ返すは間

違つてゐる。山本が、總理として、こんな處置はいかん。もし、山本が本當にその氣なら、俺にも俺の考へがある、

そこで、私は當時、鎌倉に靜養してゐた友人の處へ電報で「急用があるから歸れ」といつてやると、友人が來る、「そちは山本を能く知つてゐるといふから、しかと彼の肚を確かめて呉れ、寺尾をやつたが、要領を得んのぢや、本當に孫を賣るつもりかどうか、夫れによつては、私にも考へがある、私が引受けて世話をする」といつてやつた。

翌朝、友人は、六時ごろに行つて山本に會つた。山本の答へには「何も、孫を賣るやうな事をいつたのではないが、寺尾が議論を吹つかけるから、僕の語勢もそのために荒くなつたかも知れぬ、孫へは相當世話するつもりだ」といつたといふので、事は收まつた。しかし山本は附け加へて「迷惑は迷惑ぢやが」と言つて居たさうぢや。

賴つて出る化物

その後、山本に會ふた。その時は、私が會ひに出かけたのぢや。日米移民問題や、支那問題がやかましいので、殊に排日騷ぎぢや。其時外務大臣は牧野ぢや。私が行くと山本は早速出て來て、おだやかな應答ぢや。別れる時には、又何卒お出でをといふ挨拶ぢやつた。

その時、山本は、「難問題が出て困る」といふから、私は、

「これからそんな問題は幾らも出ますよ。化物でも賴りになるやうなものを當てに出て來るんぢやから、あなたを賴つてこれから難問題が幾らも出るぢやらうから」といふと、「否や、そんなに出られちや困ります」といつてゐた。

彼れは正直者で、その實行力は、從來總理になつた連中の三、四人分も有つてゐた。例のシーメンス事件といふので、責を引いて辭職したのぢやが、彼に十分力量を振はせなかつた事は殘念ぢや。

印度亡命客ボース

印度亡命客、ボースは最初我が國に滯在十日の猶豫を得たのぢや。私の處へ、始め宮崎滔天の紹介で來た。その時は、たゞ何といふ事もなし話しに來たゞけであつた。處が、十日後になつて、我が政府から「三日間に上海へ立退け」といふ事になつたさうで、また私の處へやつて來た。

三日目に出る船は米國へは行かずに、上海から歐州へ行く。そこで、英國の官憲が彼を上海でおさへやうといふのぢやらう。彼の生命はないものときまつてゐる。

私はボースに告げて、

「私の努力で、お前の意の如く、世話が出來るかどうか知らんが、兎に角盡力をする。盡せるだけは盡して見やう」と答へた。

そこで、寺尾は石井外相を訪問する。犬養は一木內相を訪うてボースの退去日延べを賴んだ。ところが政府では「彼は獨探である」というて承知しない。獨探であるかないかは調べれば造作なく分るはずであつたのぢや。そこで、

「おれはおれの覺悟で遣り方がある。おれなら差支なからう。おれはおれだけのことをする」と、かう決めた。

それから杉山（茂丸）を呼んで相談し、內田（良平）にこの仕事は任せることにした。丁度相馬（新宿中村屋主人）がこのことを聞いて、匿まはうといつてゐるとの話ぢや。それはよい都合ぢやといふ事になり、ボースは暇乞ひに來たのを隣家の裏の方へ逃げて、杉山の自動車をその方へ廻して置いたのに乘せたのぢや。

ロバートといふ英人で、大學に教授をした男が、その後いつてゐた。

「あれは、あなた方のやつた事は宜しいので、もし、あれが地を替へて、英國政府が、貴國の場合に立つたら、他を向いて知らん顏して、取合はなかつた事でせう」と。

あれを、あの儘、英國へ引渡さうものなら、國家の恥ぢや。兎に角愉快な事であつた。この事では骨を折つた內田や葛生に、又ボース自身も話があるぢやらう。

× × × × ×

內田良平氏談

深夜の電話

ボース氏の事は、あれは大正四年十二月の出來事であつた。

十一月三十日の夜——と言つて其夜の曉方——十二月一日の早曉だ。三時か四時頃と思ふ刻限に、突然頭山翁の許から電話で私に直ぐ靈南坂の翁の邸へ來てもらひたいといふ。

例にない事で、冬の初めであり、夜が永いのだからまだ〳〵明け放れるには間がある。私はこんな不時の早急の電話に駭かされて、何事が起つたかと、危みつゝ靈南坂へ駈け付けた。

頭山翁の邸前には、一臺の自働車があり玄關は開いて居た。

私は、翁の居室へ通ると、先客が居た。それは杉山茂丸氏で、只事ならぬ緊張した光景である。

「夜中、來てもらつて大きに迷惑ぢやつた」

「用事は何事です」

「實はあの印度亡命のボースの事ぢや。どうでも外務省が日本退去を命ずるといふので、已に其の命令狀は發せられたのぢや。併し、國家の體面にかけても、之は、退去させて、英人の手に捕縛させる譯には行かぬ。それで君にも一つ御相談ぢや」

杉山氏の語る處では、ボース氏が、最後の賴りとして頭山翁に縋つて來たものを、此儘見殺しには出來んといふので、翁とも相談の上、私に、此の仕事をやつて呉れといふのぢや。

頭山翁御自身も徐ろに口を開かれて、

「餅は餅屋ぢや、荒い方の仕事は、其方のものぢや。其代り、牢屋へ坐る事は私がやるのぢや」

當時、ボース氏は、印度詩人タゴールの一族といふ事にして矢張りタゴールと稱して居た。歐洲大戰時で、ボース氏が印度に叛亂を起して、英國の羈絆を脫しやうと企てたのが發覺して、正に英國官憲の手に捕へられる處を危く日本へ逃げて來た。それを英國大使館から、我が政府へ

ボース氏引渡を迫る。時の外相、石井菊次郎氏は、事勿れ主義から、之を諾して、十二月二日限り日本退去を命じた。此の二日に橫濱を出る船は、香港に寄港する。そこを狙つて香港の英國官憲の手で之を捕へようといふのである。ボース氏の運命は已に谷まつた。此の窮鳥が最後の救を頭山翁に求めて來たのぢや。そこで、頭山翁は、ボース氏を匿まつて、決して英人の手に渡さぬと覺悟を定め、自分は其の責任者となつて牢屋へ坐りに行くといふのでサ。

私は、今更らに翁の覺悟の好い事に感心した。

印度人の神隱し

それで、杉山氏とも相談の上、此の仕事は私は實行の役目を引受けたのぢや。兎角して夜は明け放れる、十二月一日ぢや。二日は明日に迫つて居る。私は一旦自宅へ歸り、ボース氏を何處へかくまつたものかと考へて見た。頭山翁の宅か、私の宅かと考へて、何方も、警察の目が付くに極まつて居るのぢや。何處か人の氣の付かぬ家はないものかと考へあぐんで居ると、そこへ、ひよつくり佃信夫氏が訪ねて來たのぢや。それは朝の十時頃ぢや。佃氏は、朝鮮で往年東學黨事件以來の私等同志で、黑龍會の元老の一人ぢや。私は今思案に餘つて居るボース氏の事を話し出す

と、

「實は其話で己れが來たのぢや。其の印度人を匿ふ場所があるのぢや」と佃氏が確信ある言ひぶり。

「それは好都合ぢやな、何家ぢや」

「あの新宿のパン屋、中村屋ぢや、相馬愛藏氏ぢや」

「どうしてそんな話が出來たか」

「それは、中村弼から持つて來た話ぢや。あの法學博士中村進午の兄で、以前二六新報に居つた人間ぢや。彼れが私の處へ來て然ういふのぢや。中村屋で、此の不幸なる印度亡命者を匿つても宜しいと向ふから言ひ出したといふのぢや。弼氏は新宿に住んで居るので、日頃、あの中村屋からパンを買ふ。それで、相馬氏と顏馴染になつて居る。すると、昨日、中村屋の店へ立寄ると相馬氏が我が政府の弱腰を憤慨して、あの印度人を英國へ手渡してはならぬ、萬一の場合には自分の裏二階へ匿まつてもよいといふのだそうぢや。相馬氏夫人も、例の黑光女史で名を取つた女傑ぢやで、是は何よりの强味ぢや」

「それは、好都合ぢや、我々同志の宅では、直ぐ警察の手が廻るが、あのパン屋なら、一寸當りが付くまい。是は天の助けぢや、夫れと決めて欲しい」

「宜しい、己れが之から中村弼に會ふて然う決めやう」

それから、私は佃氏と同行して又頭山翁の邸に參り、此事を語り、依て、中村弼氏にも來てもらひ、又同氏を介して中村屋相馬愛藏氏をも其場に招き、相談の結果、愈々中村屋へボース氏を匿ふ事に決めた。

明日は二日で、退去の日となつて居るから、仕事は、今夜中に運ばなくてはならない。それでボース氏、グプタ氏、他二名の印度亡命者には、今夜頭山翁に暇乞ひといふ事にして靈南坂に來るやうといふ策を授けてやる。晩になつて、ボース氏等四名は警官四名附添ひで、靈南坂へやつて來た。

先づ、頭山翁と隣り合つて居る、寺尾亨博士の處へ四人の印度人は、今回いろ〳〵世話になつたといふお禮を申述べに入る。寺尾邸を辭する時、寺尾夫人等は高聲に別れを告げて他意もなく別れを惜む樣子ぢやから、附添ひの警官も流石に氣の毒に思つて警戒心が多少緩になつて居た事だらう。

其足で、四人は、直ぐ頭山邸へ表門から入つたものぢや。勿論、靈南坂の頭山邸は、行止りち

やから、警官は玄關の處に見張つて居る。他には拔け道もない筈ぢや。謀は密なるを要すで、私共の方では、印度人を奪ひ取らうなどいふ氣配は微塵も示しはせん。今は只だ萬策盡きて、せめてもの心やりに、頭山翁へ暇乞ひをさせて歸すといふ態度ぢやから、警官の方でも、安心し切つて居た事ぢやらう。

明け放しの答辯

一旦頭山邸へ入つた四人の印度人は、直ぐ變裝して、頭山邸の裏の斷崖を下り、其處の家の庭を雪崩の如くに通過して坂下の對支連合同志會の前へ出る。其間、宮川一貫、白石好夫の兩猛者が護衞の任に當つた。そこから、用意の自働車で——當時、自働車が未だ少ない時代で、杉山茂丸氏が、桂公から貰つたといふ快速な自働車が此時の役に立つた。——四人の印度人は、佃信夫、中村弼の兩氏に護られて新宿へ飛ばしたのぢや。途中の事は、とんと盲馬車の樣で印度人等にしては夢中であつたらうと思ふ。新宿へ行つてからの事は、ボース氏自らの話があるだらうから、私は私丈けの話を續けやう。

扨て、頭山邸玄關前に見張つた四人の警官ぢやが、之は些と可哀相な事になつた。夕方から見張つて、玄關へ脫いだ四人の印度人の靴を質に取つて見守つて居るので、隨分氣の揉める番人ぢやな。遂々日が暮れて待てど暮らせど、靴の主は出て來ん。八時が九時になり、十時が十一時になる、氣が氣でない、と言つて、頭山と言ふと、大した威力で、之は歷代の總理以上恐ろしいのだから、警官も迂濶には物を言へない。はら〳〵して、腹を減らして冷へるのを我慢して居ると、救ひの神が隣りの窓から聲をかけて呉れた。

「おゝ、君等は何時迄然うして立ん坊をして居るかな、身體が冷へるぢやらう」

寺尾亨博士は、慈悲をかけて呉れたものぢや。

「いや、先生御厚情忝ない次第で。先刻から斯うして印度人を待つて居りますのですが」と警官泣き聲ぢや。

「共の印度人なら疾くに歸つた筈ぢや」

「え〻？　歸つたのですか？　靴があの通りあるのですが！」

「靴と人間とは離れられん筋合でもなからう、はだしでも人間は歩けるんぢや」

「へ！　では遁げたんで！」

「いや、遁げたのかどうか私は知らんがの。何んでも疾くに歸つた事丈けは確かなやうぢや。私

の處へ別れの挨拶に見えて頭山君の處へ一寸顔を出して直ぐ歸るのぢやと言ひをつたがな」

警官四人は腰を拔かしてへたばつたのぢやな。それで、警察署の方へ電話をしてどうしたものかと相談したといふ。時の總監は西久保弘道ぢやつたらう。頭山邸の家宅捜索は見合せよといふ命令ぢやつたとか聞いた。

警官は駄目を押して、頭山邸へ恐る〳〵伺ひを立てゝ印度人を出して呉れといふのぢや。すると、頭山翁は自身玄關へ出て來て、

「印度人は疾くに歸つたのぢや、疑が晴れんのなら家の中へ入つて見るがよい」

明け放した態度で穩かに言つたものぢやから大丈夫さ。

警官の方では、總監から「滅多に頭山邸の捜索はしてはならぬ」と言はれてあるのに、今頭山翁の靜かなる事林の如き態度ぢや、手も足も出ない、泣き〳〵引上げたものさ。

頭山翁のえらい處は此處ぢやな。自身玄關へ出て、投げ出した物言ひぢやから警官も手が出なかつた。

私の顔は潰れても……

「靈南坂で、印度人が消えて了つた！」

斯ういふ噂がぱつと散ると、騒ぎが大きくなる。遂う頭山邸は化物屋敷にされたのぢや。第一に困つたのは我が政府ぢや。翌くる二日には、退去させると英國大使館へ約束をした當の印度人が、居なくなつた。と言つて、

「頭山を逮捕訊問して白狀させよ」といふ命令は出す事は容易でない。松方や伊藤井上を憚伏させた頭山翁を縛る事は大隈總理も憚るのぢや。後難が恐しい。來島に隻脚を取られた大隈が、モ一ツの隻脚を取られないとも限らない。そこで仕方ないから、外務省から、印度人逃亡の事を英國大使館へ通告する。同大使館ではかん〳〵に憤つた事だらうさ。棄て置けぬとあつて、

「此上は日本の政府へは賴まぬ。自力で以て草を分けてでも、彼れ叛逆者ボース等を捜し出そう」といふので、方々の探偵社を金にあかして働かしたのぢや。

然うなると、我が政府では甚だ苦しい立場になる。そこで、外務省では、窮餘の一策として、我々浪人黨の方へ或るスパイを入れて結束を破らうと試みた。それは「飲んべ安」とあだ名された、名の通りの飲んべで、飲ませさへすれア何事でも厭はぬといふ無節漢ぢや。是が亦浪人仲間の一人で、始終外務省に出入りして居つた。外務省では、此者に大いに飲ませる事にして我々の方

へ差向けた。飲んべ安は、先づ其の舌鋒を俠氣に富んだ好人物と睨んだ寺尾亨博士に試みた。

「あの印度人は殺させませぬから、其の隱れ家丈け打明けて下さい。然うしたら私共の手で、もつと安全な地へ送り届けます。先生方は已に一旦彼れ等亡命客を助けてやつたのですから、それで面目が立つたので御ざいます。決して惡い樣には計ひません。兎に角一度石井外務大臣とお會ひ下さいませ」

寺尾博士は、純學者肌で策略のない一刻な人であつた。その會見の模樣は私共には知らないが、其結果として寺尾博士は頭山翁に復命して曰く、

「政府では、印度人を保護するから、一先手渡して呉れといふ。政府も實は英國に對して國際の約束を果し得ない苦境ぢやらう。そこで、若し政府が極力捜査を行つて自らの手で印度人を捕へたとしたなら、我々が折角今日迄骨折つた事も徒勞に歸する。今の中政府に委してはどうか」

頭山翁は之に對して「それは、印度人が絶對に安全を得らるゝなら、それもよからうが」といふ事で私に共話を傳へて來た。私は、そんな絶對の安全のといふ口頭の事は信じられない、仙氏も私と同意見で、

「我々は、是迄骨折つて來て、今更ら彼等を敵に手渡す事は出來ない。政府が今になつて窮餘の策としてそんな調子のよい事をいふが、最初は矢張り彼等をむざ〳〵敵の手に渡す事を辭しなかつたのぢや。そんな事では信用が出來ない、是は渡してはならん。是は非常な決心を以てやり通さなくては」

其頃には、大分日數が經つて、ボース氏等は、中村屋に居らなかつた。捜査が嚴しいので、中村屋の隱れ家も怪しくなり、轉々と處を變へて逃げ廻つて居つたので、我々の方では可なり氣を揉んで居たし、此上は最後の覺悟が必要と覗んで居つた。若し、萬一の場合には我々の同志の一人として時の農商務大臣たる河野廣中氏の處へボース氏を持込んで匿まはうと考へ、河野氏が引受けなかつたら、モウ仕方がない、ボース氏に腹を切らせて其首を英國大使館へ投げ込んでやらうといふ段取り迄考へて居つた。そこで私と仙氏と頭山翁の處へ駈け付けて談じた。それで、寺尾博士の談判では手緩いから、我々が出向いて石井外務大臣と直かに物を言はう。それには、先づ寺尾博士に來て貰はにやならんといふので、頭山翁は直ぐ隣りの博士を招く。

私は寺尾博士に向ひ、

「外務省の言ふなりに、印度人を引渡した處で、それは外國へ送らるゝ事でせう。然うなると我我の手は屆かん。つまりは、十二月二日前へ逆戻りです。是は絶對にいかん。外務省の方は、私

共が直かに言ひますから、先刻のお話は、取消しにして貰ひませう」

「夫も然うぢやらうが、私は、安全を保證するといふ事で、外務省へ引渡しの約束して了つたのぢやから、然う簡單に取消しなど出來ん」

「そんな口約などは、どうにでもなります。非常の場合、非常手段を取らではなりません。私共にお任せ下さい、貴下のお顏をつぶすやうな事は致しません」

「私の顏などどうでも構はんが、然うなると、頭山君の顏にかゝる。私は頭山君を代表して行つた形になつて居るのぢやで」

此時頭山翁は始めて口を開いて、

「私の顏が潰れても印度人の生命が無事であれア可いのぢや」

流石、頭山翁はえらいもので、斯う言はれると、寺尾博士も一言なしで、一切私共に委せるといふ事になつた。

首にして渡そうか！

外務省に引渡さぬといふ事に一決したのだが、後を引受けた私共兩人の責任は重くなつた。外務省への交渉はどうしたものかと首を捻つたが、外務次官の伊集院彥吉氏と佃信夫氏とは懇意の間で、其の紹介で、佃氏が石井外相と會見をした。佃氏は、簡單明瞭に要點を談じて、今回の印度人逃亡に關しては、外務大臣は責任はない。逃亡は警察の手落ちで、つまりは內務大臣の責任問題だ。故に、外相は、英國に向つては、已に逃げた者は仕方がない、見付かつたら處置をするからと言つたらよからう。無理して探し出す必要もない。未だに行衞が判らぬと言つて置けばそれで濟む事だ。國際問題としては、今日の形勢上何等重大な危機を孕む心配もない。といふやう意見を述べた。之に對しては、石井外相も贊意を表した。實際、然うする他に道がないのだからね。唯だ殘るは、內相の責任問題だ。

之に付いて佃氏は、石井外相に斯う言つた。

「是は造作ない。貴方は外交問題として之を引受け、內相に向つては、唯だ『逃げた者は逃げたなりで私に預けて欲しい』と斯う言へば、內相は責任を轉嫁した形で、自づと救はれるのです。それを貴方が更らに逃げたなりに、印度人を頭山に預けるといふ事にすれば、自分の肩も輕くなるといふもので、萬事は解決です。頭山は、日本の面目を傷けず、又、貴方方のお顏を潰さぬ樣立派に之を預ります。此點は我々非常な決心を以て保證します」

斯う出られては石井外相も異議はなかつた。そこで、今度は、頭山翁石井の直接會見となつて、此問題は一切頭山翁が預かるといふ事に決まつた。

それで、石井外相から英國大使に向つては、どういふ風に話を付けて宜しいかといふ問題が殘つたのだが、之は、思ひ切つて痛快な事にした。其の大要は、

「日本は歐米諸國と異り、建國の歴史も異り、國家組織も異り、人民の階級も亦異る。それで、日本には浪人といふ一種の階級がある、其の中心となる者は、眞の國士であつて、今回問題の中心人物たる頭山は此浪人の巨頭である。國家大事ある毎に此の浪人が特殊の活動をして義勇奉公の誠を致すのである。往年三國干渉の時なども此の浪人が奮起して遂に燒討事件なるものを生じた。政府と雖も、之を奈何ともしがたい場合がある、之を強ひて壓迫しやうとすると、大動亂が起る。故に、此の內情をとくと考慮に入れてもらひたい」といふ樣な事であつたらしい。

英國では、我が政府に文句を言つても追つ付かないと見たものか、其後は餘り外務省へ此問題を言つて來なかつた。そして自力の搜査探索が一層嚴しくなつた。其前、グプタ氏は、中村屋を脫して一時大川周明氏方に潛伏したが、やがて米國に亡命したので、後には、ボース氏一人が英國官憲の注目の的となつた。其中歐洲大戰止み、平和克服したが、ボース氏は、其間も風聲鶴淚

一日も安き心もなかつた。遂にボース氏は日本に歸化して始めて、安全な身となつた。

言ひ落したが、石井外相との談判が成立して後、私が河野廣中氏に會つた時、當時の事情を語り、

「あの印度人問題で困つた時、私は、貴下の處へ匿まつて貰はうと思ふたのです。それで若し、貴下が、大臣といふ地位上、夫が承諾しにくいとでもいふ事だつたら、モウ仕方がないから、印度人を首にして英國大使館へ投げ込むつもりであつたのです」といふと、河野氏は莞爾として、

「實はあの時、私に御相談がありはしまいかと思つて居ました。私の宅へ匿うのが一番よかつたかも知れません。其時は、然うとも氣付かなかつたのです」流石、河野氏で、一向蟠りのない氣象であつた。

× × × × ×

（頭山翁自ら、俺れの家は遂う化物屋敷にされて了つたと笑はれたといふ、その靈南坂の邸宅は其後大震災の時、翁が御殿場に避暑中に燒失したので、印度人消失の舞臺面も今はたづぬるによしなし、殘念である。靈南坂上の行き止りの頭山邸といふのは淸楚閑靜な仙境の氣分があつて、天が亡命印度志士を扶くる爲に設けた特別の舞臺でもあつたらう。）

ボース氏の談を綜合して

（ボース氏は、昨年の春の或日、午後から晩へかけて日本へ亡命してから歸化人となる迄の經過を微に入り細を穿つて物語つたものであるが、夫を速記したでもないのだから、以下其の大要を記述する。（編者記））

× × ×

頭山翁を訪問す

ボース氏が、我國へ亡命して神戸へ上陸したのは大正四年六月八日で、それは歐洲大戰最中であつた。京都を一見物して翌日東京へ向け汽車に乘り新橋驛へ着いたのは夜遲くであつた。全くの他國へ來て知るべもなく、日本語は少しも語れず、驛頭に迷ふて居た。すると親切なる一巡査が、其の擧動を怪み、誰何して、其の何れは印度あたりの風俗と見て、天涯の孤客の運命を憐み自分の知つて居る宿屋を叩き起して、そこへボース氏を泊めて呉れた。つまり、ボース氏は東京

へ着いた其晩から日本人の厚い情に浴して、同じ東洋人たる親しみの念に培はれたのである。

夫れから、ボース氏は、其の以前から東京に來て居た印度同志と共に麻布笄町に一戸を借りて潜伏して居たのであるが、或朝、外出しやうとして、玄關で靴を穿き紐を結んで居ると、玄關の戸の外に怪しい人影が立つて自分の手を熱心に見入つて居る。

「はツ」と氣が付いた時には已に遲し、ボース氏は、印度の英國反逆者たる證據を看破られたのである。それは、以前ボース氏は、爆彈に打たれて右手の指が二本傷痕を殘して居る。紐を結ぶ指を注視した人間は、敵のスパイであるに相違ない。

「失敗つた！」と思つたが、追付かず、其日以來、探偵樣の人間が、絶間なく彼れの身に附纏ふ事となつた。ボース氏も、之には閉口した。遂に彼れは警視廳へ出かけて、何故に日本の警察が政治犯の外國亡命者をかくも執念く探偵付けるのかと反問して見たが、其の返答は一向に要領を得ない。危險が刻一刻迫つて居ると感じられるのは其折り、印度人同志で日本に居る男が來て、支那亡命者孫文がボース氏に會ひたいと言つて居ると告げた。それといふのは、ボース氏の部下の一印度人がボース氏の日本に來て居る事を、當

時米國に居つた孫文部下の支那人に知らせた。其の支那人は更らに其事を孫文に通知してよこしたのである。斯ういふいきさつから、同じ亡命者の身たる孫文が、ボース氏に會見を希望した事も當然であらう。そこでボース氏は、麻布靈南坂の寺尾亨博士邸の近所に居つた孫文を訪問したのである。双方共に母國の救濟の爲に起つて、一身の置き處もない兩壯士が、當日會見の模様は推察に難からぬものがあらう。いろ〳〵心胸を披いて語つた上、孫文は、ボース氏の窮境に付いて一つの救解策を叫いた。それは、孫文自らが、其折り、世話になつて居る「日本浪人の巨頭と して時の政府をして尙ほ憚らしむる頭山滿先生」に一度會つて身の振り方を相談するが宜しからうといふ事であつた。それに付いては、孫文は、先づ宮崎滔天氏へボース氏を紹介して呉れたのである。其の宮崎氏は、更らにボース氏を頭山翁や寺尾亨博士に紹介して呉れた。併し、夫れは單なる紹介の程度で、未だ何等の親しみも生じなかつたのである。勿論此の會見に依つてボース氏は、頭山翁保護下に安全を得た譯でもなんでもない。唯だ、恐しい威風のある、何さま、在野第一位の有力者らしい獅子王の如き寡默の日本人に會つて異樣の感を得たといふに過ぎない。

日本退去の命令

兎角する中、其年の十一月二十七日に、上野精養軒に、在京印度人が會合して日本の御大典奉祝會を擧行した。當日の會合者は、ボース氏始め、同じ印度志士として知られたグプタ氏其他何れも印度革命志士や、之に同情する人達であつた爲めに、自然慷慨激越な言動が多く、何れも英國の印度壓制に對して反抗する語氣を洩らした。加之、其の會場に揭げた萬國旗と稱するものは、其實、日印兩國國旗のみで、英國々旗などは一つもなかつた。日頃、在京印度人の擧動に目を光らして居た英國大使館員等は、此の光景を見て、容易ならぬ事と勘付いた。已に本國の印度では英國に對する反逆者として死刑を宣告され、其の首には、莫大な賞が懸けられて居るボース氏が、日本へ亡命して、今や公然上野で反英氣勢を揚げて居ると知つては、一刻も容赦がならない。そこで、翌日早々英大使は我が外務省に向つて此の反逆者ボースを自分等の手へ引渡す事を嚴談に及んだものである。

初め、外相石井菊次郎氏は、此の交涉を極めて不用意に輕々に取扱つた。勿論、當時の日本政府は、大の親英主義で、何んでも英國の言ふ事を聽くといふ、事大主義の心境に在つたのである から英國の不機嫌を買つて迄も、印度亡命客を保護しやうといふ氣もなかつたし、夫れに英國では、ボース氏を英國及日本の共同の敵たる獨探であると斷明して居たので、石井外相も簡單に夫

れ丈けの事に考へて、此上は英國大使の要求に應じて事勿れ主義を取るが宜しいと考へたのであらう。但し國家の體面上、窮鳥懐に入つたボース氏をむざ〳〵日本警察の手で捕へて英人に手渡す様な事は出來ないから、一先づ國外に退去させる。そして、海外で英人の手に取押へる様に斗らはうといふ事にした。

奉祝會の翌日、麻布笄町のボース氏の假寓へは二人の日本刑事が來て、六本木署へボース氏の同行を求めた、不吉の豫兆に、ボース氏は胸を波打たせながら、六本木署へ行くと、署長から、十二月二日限り日本を退去すべき旨の命令書を示された。

「夫れは又何故？」と反問したが、

「理由は知らん。唯だ政府の命令を私が受次ぐ丈けだ。之が私の職權行使です」

取付く島もない。勿論署長は、氣の毒そうな顏で申渡したのである。

ボース氏は、英國官憲の手が廻つた事を直ぐ勘付いたので、憤慨した。

「いや、私は日本を去りません、死んでも去る事をしません」

「それは、君の勝手と言ひたいのだが、私は職務上、どうあつても君の退去といふ事を實現させる責任があるのです」

「いや〳〵私は日本を去りません」

ボース氏は憤然として六本木署を出た。そして直ぐ、芝白金に假寓して居た同志グプタ氏の處へ行つて見ると、同じ様な退去命令が來て居る。

二人は相談の上、坐して死を待つべきに非ずと、それから、日本の新聞記者團や、いろ〳〵の團體へ交渉して救解策を講じて見た。何れも十分に同情して呉れ、日本政府の弱腰を罵り、英國の鼻息を窺ふ日本外務省の無力さかげんを憤るのであつたが、併し、志はあれども能力はない。政府の命令に對して、敢然反抗して之を取消さしむる能力は誰人にも持合せなかつた。

とゞのつまり、ボース氏は、前日孫文に敎はり、宮崎氏に紹介されて初見參をした日本浪人の巨頭として、歷代の政府をも恐れ憚らしめ來つた頭山滿翁の門に一縷の望みを懸ける外なき窮境となつたのである。そこで彼れはグプタ氏と連れ立つて、鬚南坂の頭山邸に現はれた。

「出來る丈けの事はしやう」と答へたきり。

頭山翁は、默々として兩人の訴ふる處を聞いて居たが、最後に只つた一言、

ボース、グプタ兩氏は夫れ丈けの事で、頭山邸を辭する外なかつたのである。

門を出て數步、グプタ氏は悄然として嘆じた、

「あんな事では所詮望みはない」

ボース氏は、之に答へて、

「うむ、併し、僕は然うは思はん、一縷の望みはある」

斯うは言つたものゝ、暗い心は少しも明るくなつて居なかつた。此の一縷の望みも誠に細々とした頼りないものに思はれたのである。

併し、一諾千金、頭山翁の胸中には萬斛の同情があり、其の鐵の如き意志には千鈞の重さがあつた。折角私を頼つて來た亡命者を見殺しにはされぬ。「出來る丈けはして見やう」此の一語は、自分の全力を盡して見やうといふのである。一刻の猶豫もなく、翁は腹心の人々を呼び集めて、印度人救濟の相談をして見た。其結果は、外務省に向つて、印度人の退去命令を取消さしむるの一途あるのみといふ結論となつた。

そして、頭山翁のお使者が外務省を訪ねたのであるが、石井外務大臣は、

「あの退去命令は已に決定した事で、今更取消しなど出來るものでない」ときつぱり挑ね切つた。幾ら說き付けても聞き付けない。

斯うして居る中に、十一月三十日の夜となつた。頭山翁の手に殘る切り札は只つた一つ、

「此上は印度人を奪ひ取つて匿まはう」

是以外に方法がない。英國の威壓を恐れて、亡命客を見殺しにする樣な眞似をされるか。此に頭山一黨は奮起した。議に與るは先づ、杉山茂丸氏、それから曉方の三時頃、電話で黒龍會の內田良平氏を招いた事は、前に內田氏の談の中に詳しいから略す。

印度人消えて無くなる

ボース氏の語る處は內田氏の語る處と表裏をなして居るので、稍や重複の嫌ひもあるが、出來る丈け詳しく記述しやうと思ふ。十二月の二日に日本を退去するとなると、當日橫濱を出る外國行きの船は一艘しかない。それは歐洲航路に屬するもので、當然香港を經由する。香港は英國の勢力範圍であるから、英國官憲は香港でボース氏を捕へるといふ段取りである。捕へられたら死刑は已に宣告されて居るのである。

已に十二月一日の朝となつて、まだ救ひの手が現はれない。ボース氏はモウ脫れる手段がない。死を覺悟して居た。そこへ宮崎滔天氏の使者が見えて、

「せめては、今晚、頭山翁の處へ暇乞ひでもして行つたらよからう」といふのである。

そこでボース、グプタ兩氏、他二人の印度同志と都合四人、靈南坂へ出かけた。勿論、是は警察へ願出て、許可を求めた事で、刑事が四人附き添ふて自働車で出かけたのである。先づ寺尾博士邸へ立よる、「明日、日本を去る」といふので、永々お世話になりましたといふ意味の挨拶を述べる、寺尾邸を辭する時、寺尾夫人は、はつきりと門外に見張つて居る刑事等へ聞える様な聲で「誠にお氣の毒、折角無事で」といふ。いかにも遺る瀬ない、あきらめ切つた別れの場の光景である。刑事等も、今更らに氣の毒なといふ感に打たれて警戒心が緩まうといふもの。

次いで隣家の頭山邸へ四人の印度人が入つた。

頭山邸は、靈南坂上の行き止りであるから、刑事等は門外に見張りをして居れば大丈夫と安心して居る。第一に四人の靴が玄關に行儀能く並んで居るのが外から見える。人間は滅多に洗足で歩くものでないのだから、此の靴を質に取つて居さへすればといふ輕い心がある。今も今、寺尾邸のお別れの濕つぽい聲を耳にしたばかりの刑事等の心は、頗る緩やかなものになつて居る。

一方頭山邸の奥座敷に入つた四人の印度人——此の頭山邸は大震火災の時、燒失して了つたのであるが、頭山翁自ら新築されたもので、中庭を取つた平屋造りであつた様に思ふ。それで奥座敷の方は、表玄關からは一寸覗きにくい間取りである。此の室に入ると、其處には、內田、杉山、寺尾氏始め、宮崎、佃、中村弼氏、大崎氏、的野半助氏、本城氏、水野梅曉氏、大原義光氏萱野長知氏、美和作次郎氏、白石好夫氏、宮川一貫氏など控へて居つた。何れも、黑龍會畑の猛者なのであるが、是程の豪傑が十餘人も潛んで居て、更らに門前殺氣立つた風もなく、十二月の寒空に鴉が淋しく啼いて、人氣もなかつたといふは、流石に不動山の如く靜かなる事林の如き頭山翁の感化であらう。四刑事も更らに疑ふ心さへなかつたといふ。

ボース氏一行四人が、室に入ると、行きなり、四人とも日本外套即ちとんびを着せられた。「この顏ではなア！」と頭山翁も、印度人の黑い肌は、夜でなくては芝居が出來ない事をつくづく嘆じたといふ。

日本式とんびの襟を立て、中折帽を被つた印度人——日は全く暮れたので、あやめも分かず頭山翁の嘆聲も不用となる。

「一刻も早く！」とばかり、一同は、座敷から臺所へ下り、そこから、裏口へ出て垣根の間から裏の的野氏の庭を通り抜け、宮川、白石、佃、中村、相馬の諸氏に附添はれて急いだ。庭の植木鉢が轉ぶ。猫は背を丸くして逃げる。一行は、其家の座敷から泥足のまゝ上つて玄關へ抜ける、門を出る、其の路次を通つて榎坂の對支同志會の前へ出た。其處には、當時日本に自動車が餘計

ない頃の快速第一と言はれた例の杉山氏の自動車が待つて居る。それとばかり、印度人四人と日本志士二人が乘つて、雲を霞と飛んで行く。

「頭山邸から印度人は消えて無くなつた」といふのは、こんな光景であつた。頭山翁の言ふ、「己れの家を化物屋敷にして了つた」のである。

頭山邸の本玄關見張りの四刑事は、十一時過ぎになつて、印度人が消えて靴ばかり殘つて居る事を隣りの寺尾博士から聞かされた時、腰を抜かしてべそ掻いて、頭山翁に、印度人を返して下さいと哀訴し、

「私共が首にされますから」といふと、翁は落着き拂つて、

「君等が首になつても人の生命が助かつたらよからう」と言つて聞かせたので、四刑事二の句がつけなかつたといふ。

新宿の中村屋へ

扨て、一方四人の印度人の行衞。

自動車は一旦お濠の端へ出て、左折して、大きな四辻から又左折したといふから、之は四谷見附前を通つて新宿通りへ廻つたのであらう。間もなく、新宿角筈の中村屋前へ着くと、一同下車して中村屋の奥の二階室へ通る。その時、四人の印度人は、とんびを脫がされ中折を取上げられる。間もなく、中村屋の店に居た四人の中僧君が內證で奥に呼ばれて其のとんびと中折を身に着けさせられて、又其の自働車へ乘せられて、何處ともなく飛び去る。

「來たかと思ふたら、モウあのお客さん達は歸つた」と、中村屋の店員達迄が、此の芝居を氣付かなかつたといふから、況んや、近所合壁では——又向への肉家の二階で立働いて居る女中達さへも、そんな事は更らに氣付かなかつた事は當然であらう。

斯うして、中村屋へ匿はれたボース氏は、是は兇狀持でもないので、唯だ志士として自分等の首領の身を案じて附添ふて居たのであるから、是は各自其の住家へ歸つて了ふ。ボース、グプタ兩人が中村屋へ落着いたのは、午後九時頃であつた。頭山邸の玄關先きで、刑事や警官が大勢で騷ぎ立てたのは十一時過ぎであつたといふから、後の祭りであつた。

中村屋の二階一室に、ボース、グプタの兩人が坐つて居ると、其處へ一人の婦人が上つて來て英語で話しかけた。

「能く入らつしやいました。どうぞ安心して此處に居つて下さい」

斯う言はれて、二人は始めて、此處が自分の隱れ家である事が判り、此婦人こそは、相馬氏夫人である事も知つて、始めて安心した。間もなく、二人は裏の菓子製造工場の後にある建物に導かれた。そこは、六疊と四疊半と二室の二階であつた。

中村屋の俠女將、卽ち相馬愛藏氏夫人——黑光女史は此の兩印度人の爲に愼重な面倒を見る事になり、別に一人忠實な女中を添へた。ボース氏の語る處に依れば、此女中は忠實にして細心、終始一貫能く秘密を守つてボース氏等の用を便じて呉れたといふのである。それで、中村屋店員は大勢であるが、印度人が同じ棟の下に居る事を知る者は更らになかつたといふ。ボース氏にしては、萬死を免れて極樂境に遊んだのである。唯だ最初の間日本食に馴れない爲に苦痛を感じ、カレー粉を買つてもらつて、自分でライスカレーを造つて食べたりしたといふ。第一に日本語を知らなくては不自由なので、每日黑光女史が見舞ふて呉れる機會を利用して會話の稽古をした。

斯うして一ケ月半ばかり、中村屋の二階に潛伏する中、グプタ氏は窮窟な生活と危險憂慮の爲に神經衰弱に罹つて、或日、二階の窓から塀を傳つて脫出して行方不明になつた。皆んなが心配して八方搜して居ると、大川周明氏方に隱れて居る事が判つた。最初グプタ氏は、何となく心配から中村屋に居堪らずなり、偶と、以前、日比谷公園で知り會ひ、其後、濠端の或る教會堂へ一所に連れて行つてもらつたりした事のある大川周明氏へ行きたくなつた。そこで彼れは、密と中村屋を脫け出した。其折り、床の間に在つた果物籠を持つて出た。是は手ぶらよりも誤間化しが利くと考へたのである。果して彼れが、途中交番の前を通る時に、黑い顏を晒らす事を避ける爲に、此の果物籠を高く左手にかざして其前を通り過ぎたといふのである。大川周明氏の宅へ行くに、先づ濠端へ出て、敎會堂の前へ出た。それから先きは二三度往來した事があるので、どうにかして大川氏の宅へ辿り付いたのである。其事を二三日して大川氏から通知して來たので始めて一同安心したといふ。

病氣が取持つた奇緣

浪人黨の方では、大成功を祝した間に、他方我が政府、外務省、警視廳では全く困まつた。警視廳としては、特に未曾有の大失態である。自動車で尾行させながら、他國の亡命者、面色の一見して知れる印度人を取逃したとあつては全く威信に關する。草を分けても詮議せよとばかり、全力で搜査を行つた。彼れ印度人は四人であつたし、外國人は肉を多く食ふといふからといふの